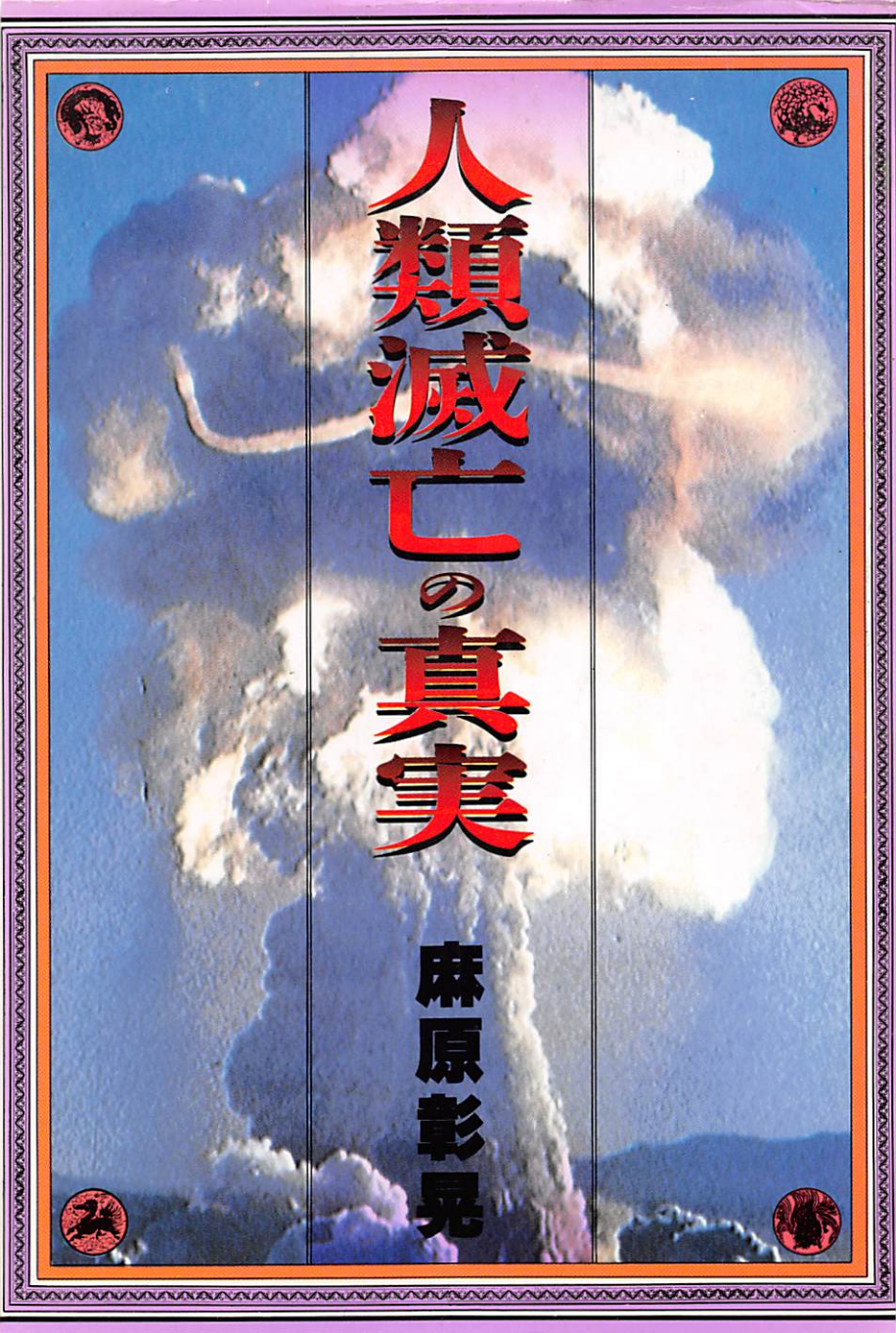
人類滅亡の真実
麻原彰晃

人類滅亡の真実

麻原彰晃

序

わたしは、『創世期』において、宇宙の創造と魂の落下を皆さんの前に現わした。しかし、まだ、その中には、人間の堕落と人類滅亡、そして、滅亡と復活については現わさなかった。それを本編で取り上げたいと思う。

この本を読んだ皆さんが、この本によって、正しい生き方を身につけ、光音天への道を歩かれんことを――。

一九九一年八月十二日

麻原彰晃

人類滅亡の真実・目次

◉人類滅亡の真実

❖第六の啓示　転輪王の輝かしき時世

❖第七の啓示　滅亡の予感、転輪王去りて

❖第八の啓示　惨劇、人類滅亡

❖第九の啓示　「獣」たちの最終戦争

❖第十の啓示　甦る、バラリンゴの大陸

❖第十一の啓示　マイトレーヤ、それは慈愛の救世主

❖第十二の啓示　聖なる流れに身を委ねよ

◉久遠の道、天への道

◉「転輪王獅子吼経」

◉

人類滅亡の真実

第六の啓示　転輪王の輝かしき時世

◉その一　新たなる落下の日

衆生（しゅじょう）よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

わたしは、ここに『創世期』に続く、新たなる啓示をあなたに与えるのである。

これより展開される啓示は、あなたに戦慄と恐怖と、そして希望を与えるに違いない。なぜならば、それは近い将来、あなたの身に間違いなくふりかかる、予言に他ならないからである。

よって、あなたはこれをよく聞き、そしてよく考えなければならないのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、遠い遠

い昔、宇宙は創造され、はるか彼方よりあなたは落下した。そして、自ら光を放つことも、空中を自由に飛来することもない、人間の世界へと生まれ落ちたのである。

天の世界で享受できるような欲楽はない。米を栽培し、それによって命を長らえるという、不自由な生活を強いられる。それがこの人間の世界である。

よって、あなたが高い世界の記憶をなくしてしまったことは、あなたの苦悩を大いに軽くしてくれた。なぜならば、それはかつての素晴らしい喜びを忘れさせ、あなたにいつわりの幸福と満足という錯覚を与えてくれたからである。

だが、それは、いずれさらに低い苦しみの世界へと堕ちていく悲劇的な因となっていくのである。

しかし、あなたは気付いてはいないが、あなたの深い意識はその記憶を失ってはいないのである。

よって、あなたはその記憶が完全に消え失せる前に、早く心の本性へと到達するための道を歩かなければならない。そして、この世の無常を悟り、幻影から目を覚まし、永遠の幸福と自由と歓喜を手に入れなければならないのだ。

なぜならば、新たなる落下の日が近付いているからである。

◉その二　八万歳の寿命

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

これから明らかにする予言の前提として、わたしはまず、あなたがこの人間界に堕ちたころの話をしなければならない。

そして、来るべき悲劇を回避するための手がかりともいえる時代の話をしなければならない。聞いて、よく思い出すがよい。

これは、まだあなたが光音天、神聖天、戯忘天界と落下し、人間界へ堕ちたばかりのころ、つまり、あなたが盗みや殺生といった悪業を知らず、実に八万歳の寿命を誇っていた昔のことである。

正法が存在するといわれるバラリンゴの大陸に、ダルハネーミ（堅固な車輪王）という名の国王がいた。この王は、天の車輪にのっとり法則を説く王様、すなわち「転輪王（てんりんおう）」であった。

この転輪王が世の中を治めるとき、人間は現在知られる多くの悪業と無縁の、望ましい生活を送ることができるのである。そのため、人々の心は豊かで、平穏

であり、疲弊することがないため、長寿が約束され、そこには繁栄がもたらされるのである。

もし、このような王が今なお健在であれば、わたしがこれから話す予言はあり得なかったはずなのだ。その理由をこれからあなたに明らかにしよう。

◉その三　正法と深い感動

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

転輪王がこの世に現われるときには、天にそのしるしがある「輪宝」が生じるのである。輪宝は、十五日の戒誓行の日、王が頭を清め、戒誓行の誓いを守り、宮殿の華麗な最上部に至ったならば、忽然

と生じるのである。それは、千の車輪の幅を持ち、外輪を持ち、中心部を持つ、すべての状態が完全なものなのである。

転輪王の説くその教えは、正しい法則にのっとり、人々に長い間利益をもたらすものである。

「生き物を殺してはならない。与えられないものを取ってはならない。愛欲における邪悪な行為をしてはいけない。嘘を

ついてはいけない。酒を飲んではいけない。適度な食事を取りなさい。」

このような正法を説くことで、転輪王は人々を深く感動させ、大洋に取り囲まれたこの地を暴力や武器によることなく治めるのである。

また、転輪王には王としての「儀式」が存在するのである。

「法を尊敬の念をもって扱い、考慮し、

畏怖の念をもって崇め、賛美し、崇拝し、法の旗となり、法を輝きとし、最上の規則とし、法にのっとった守護と防衛と保護をし、身内・軍団・武人・家臣・祭司と後援者・国民と地方人・出家修行者と祭司・獣や鳥を管理しなさい。

そして、王国において、非法の行為を発生させてはならない。もし財産のない者があれば、彼らに財宝を施しなさい。

❖

また、王国において、出家修行者や祭司たちが、官能的不節制や放逸さを自制し、忍辱（にんにく）や親切を定着させ、真我に調御させ、真我に合一し、真我に完全煩悩破壊させたならば、絶えずその者を訪れて、こう尋ねなさい。

『尊者よ、善とは何であり、不善とは何なのでしょうか。とがめることとは何であり、とがめざるべきこととは何なので

❖

しょうか。依存するものとは何であり、依存してはならないものとは何なのでしょうか。わたしがなしている長い間不利益である苦しみとは何であり、またわたしがなしている長い間利益である楽とは何なのでしょうか』と。

そして、その答えを聞いたならば、不善であることを取り除き、善を記憶実践し続けなければならない。

我が子よ、これこそが聖なる転輪王の儀式なのである。」

と。

これは「堅固な車輪王」が数千年の統治を終え、もはや人間の愛欲を楽しく味わい尽くし、天の愛欲を求めるべき時であるとして、髪とあごひげを剃り、赤っぽい黄色の衣で覆い、家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を

送るようになった、その七日後、天の輪宝が突然見えなくなったことに不満を覚えた後継者である息子に語ったことである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、このように転輪王は正法にのっとり、世を治めるのである。

それは、権力欲にとりつかれ、利権には絶えずからみ、聖なる法則に対する尊

敬の念を持たず、宗教家を利用することばかりを考える政治家に支配された現代とは比較にならないのである。

すさんだ心しか持ち得ない者が世のまつりごとを行なうことは、世の不幸と貧しさを生じさせ、助長させ、民に苦しみを与えるだけなのである。

◉その四　四つの大陸を治める

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞くがよい。

そして、このような転輪王に対して、四辺の王は、進んで従うのである。

第二の転輪王となるこの「武人で頭に油を注がれた王」が聖なる転輪王の儀式を行ない、やがて十五日の戒誓行の日、

忽然と天の輪宝が生じると、王は、東の方向に前進する輪宝の後に続き、四部の軍隊を進め、輪宝が設置された場所に近付いて宿泊した。

すると、東の方角の敵対する王は、転輪王の所を訪れて、このように言うのである。

「ここへおいでください、大王よ。ようこそ、大王よ。すべてはあなたのもので

ございます。ご教戒ください、大王よ。」と。そこで、転輪王は東の国の王に訓戒し、その大陸を治めるのであった。

その後、輪宝は東の海に沈み、再び出て、南の方角に転じ、次には南の海に沈み、西の方角に転じ、次には西の海に沈み、北の方角に転じたのである。

そして、転輪王は四部の軍隊と共にその後に続き、それぞれの方角の王の歓迎

を受け、法則を説き、ついには四つの大陸の安定を勝ち取るのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、このように四辺の王は、転輪王に対して敬意の念を持ち、その善き教えに従おうとするのである。もともと、この王とは、現代でいうところの王というよりも、各地方のリーダーという方が正しい者たちなのである。

彼らには、権力欲や闘争心はなく、繁栄と平安を与えてくれる者に対する寛大な心があるのである。

このように、その昔、王の心は豊かで、満たされており、民に長寿と繁栄を約束したのである。

◉その五　功徳の象徴「七宝」

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

このようにして、転輪王は四辺に勝利し、大陸の安定を勝ち取るのである。

それでは、なぜ転輪王にはこのような力があるのであろうか。それは、真に民を思う心を持ち、崇高な心を持ち、高い知性を具えているからである。そして、多大な功徳の象徴である「七宝」と「四つの如意」を具えているからなのである。

❖

この「七宝」とは、すなわち輪宝・象宝・馬宝・水晶宝・妻宝・後援者宝・参謀宝のことである。

この「象宝」とは、「宝とするにふさわしい象」のことで、純白で、身を寄せる所を七つ持ち、如意と呼ばれる神秘的な力を持ち、空中を飛行する「象の王」なのである。

ときに、転輪王はこの象宝に乗り、朝

❖

方海に囲まれた地を訪問し、王城に戻り、朝食を取るのである。

「馬宝」とは、「宝とするにふさわしい馬」のことで、純白で、カラスの頭とサトウキビの草のようなたてがみを持ち、如意と呼ばれる神秘力を持ち、空中を飛行する「馬の王」なのである。

この馬宝も、転輪王の心をなごませ、王によってよく調御されるのである。

次にまた、転輪王は「水晶宝」を具えている。それは、美しく、優れた品質で、八面体によく加工され、その光は、くまなく十四キロメートルにも行きわたるのである。

あるとき、転輪王は四部の軍隊を整え、水晶宝を旗の先に付けて、真っ暗闇の夜を出発した。すると、あらゆる村から来た人々は、みんなその光によって、

「昼だ。」

と考え、家業に従事したのである。

次に、転輪王は「妻宝」を具えている。つまり、「宝とするにふさわしい女性」のことで、その女性たちは容姿や見た目に優れ、感じが良く、人間の容色を超えた最上の華麗な容色で、背は高すぎず低すぎず、やせすぎず、太りすぎず、色は黒すぎず、白すぎない

❖

また、その体は、触れれば、木綿か綿のような感触があり、寒いときには暖かく、暑いときには冷たいという心地よさがある。また、体からは美しい花の香りがし、口からは青蓮華の香りがする。

そして、転輪王よりも先に起きて、後に休み、何をするにも従順で、快く行ない、愛らしい話し方をする。また、身におけるだけではなく、心の上でも不倫す

❖

ることがないのである。

次にまた、転輪王には「後援者宝」が具わっている。その後援者は、神秘的な天眼（てんげん）によって、人の財産や隠れた財宝のありかを見通すのである。

あるとき、転輪王はこの後援者宝と舟に乗って、河の流れの真ん中に入り、その後援者に言った。

「わたしは、金と金貨が必要なのだ。」

「それでは、大王よ、一方の岸に舟を近付けていただけないでしょうか。」

「わたしは、今ここで必要なのだ。」

そこで、彼はおもむろに両手で水に触れ、金と金貨がいっぱいに満ちたビンを引き上げたのである。

このように、転輪王には後援者宝が具わるのである。

第七に、転輪王には「参謀宝」が具わ

るのだ。この者は、賢明で、かつ聡明で、転輪王に仕えるべき者を仕えさせ、去らせるべき者を去らせ、とどめるべき者をとどめさせるのである。

このような、七つの宝を転輪王は具えているのである

◉その六　天からの賦与

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

そして、転輪王には天から与えられた「四つの如意」というものがあるのだ。

その第一は、他の人間よりもこの上なく容姿が良く、見た目も感じも良く、最上の華麗な容色を賦与されているという

ことである。

第二の如意は、この上なく長寿で長生きをするということである。

第三の如意とは、他の人間よりもこの上なく健康で、無病で、優れた消化力がある消化器官と、冷たすぎず、熱すぎない体を持っているということである。

第四は、だれからも親愛の情を持って見られ、また転輪王自身も同じようにだ

れに対しても親愛を注ぐということである。

転輪王は、このような「四つの如意」を天から与えられているのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、転輪王とは、このように功徳にあふれているのである。そして、彼はその功徳を奢(おご)ることなく、人々の利益のために使うのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この王のもとで、人間は八万歳の寿命を保ち、人間界という低い世界ではあるが、安穏な日々を送れるのである。

しかし、この安らかなときも、転輪王あってこそのものなのである。無常を根本とするこの人間界にあっては、それもやがては崩れさるものなのであった。

第七の啓示　滅亡の予感、転輪王去りて

◉その一　継承できず

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

さて、また第二の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき、王はある召

使いに告げた。

「天の輪宝がその場所から逃げ出して消えたのを見たら、わたしに告げなさい。」……（中略）……このようにして、第三の転輪王も四つの大陸を徳によって治めるのであった。

また、第三の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき、王はある召使いに告げた。

「天の輪宝がその場所から逃げ出して消えたのを見たら、わたしに告げなさい。」……（中略）……このようにして、第四の転輪王も四つの大陸を徳によって治めるのであった。

また、第四の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき、王はある召使いに告げた……（中略）……このようにして、第五の転輪王も四つの大陸を徳によって

治めるのであった。

また、第五の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき、王はある召使いに告げた……（中略）……このようにして、第六の転輪王も四つの大陸を徳によって治めるのであった。

また、第六の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき……（中略）……このようにして、第七の転輪王も四つの大

陸を徳によって治めるのであった。

＊

さて、この第七の転輪王が統治すること数千年に及んだあるとき、王はある召使いに告げた。

「天の輪宝がその場所から逃げ出して消えたのを見たら、わたしに告げなさい。」

「かしこまりました。」

そして、それからさらに数千年の後、

天の輪宝はその場所から逃げ出して消えたのである。

召使いは王のもとを訪れた。

「王よ、輪宝が逃げ出しました。」

そこで、王は、最高の後継者である息子に呼びかけて言った。

「我が子よ、わたしの天の輪宝は、その場所から逃げ出して消えたそうだ。

以前、わたしはこう聞いたことがある。

『転輪王の天の輪宝が逃げ出したならば、もはやその王は長い間生きることができない』と。

つまり、人間の愛欲を楽しく味わったわたしが、天の愛欲を求めるべき時なのだ。さあ、我が子よ、お前は大海に至るまでのこの地を手に入れなさい。そして、わたしは髪とあごひげを剃り、赤っぽい黄色の衣で覆い、家庭生活の快適さを捨

て、家なき状態になり、禁欲生活を送ろう。」

そこで、王は息子に王権に関して完璧に指導した。つまり、転輪王の流れを詳しく説明して聞かせたのである。そして、間もなく神聖な国王は出家修行者となったのである。

ところが、王が禁欲生活を送るようになって七日経ったときのこと、天の輪宝

は突然見えなくなったのである。

この息子である「武人で頭に油を注がれた王」は、輪宝が見えなくなったことにいらいらして不満を覚えた。

ところが、そのとき、彼は父王の所を訪れ、聖なる転輪王の儀式について尋ねることをしなかったのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

このために、この王は転輪王になれなくなったのである。そして、それは破壊と滅亡という、わたしがこれから述べる予言へと通ずる第一歩となったのである。

王の果たす役割とは、このように決して小さくないのである。

◉その二　貧民と盗み

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この「武人で頭に油を注がれた王」は実に平等に大陸を統治したが、先代の王たちの聖なる転輪王の儀式を継承したわけではなかったため、さらに大陸が繁栄することはなかったのである。

そこで、信頼できる顧問・顧問・大蔵大臣・警護隊・門衛・聖典にのっとり秘密の詞を唱えることによって生計を立てる人々が集まり、王の所を訪れて、こう言った。

「王よ、わたしたちは聖なる転輪王の儀式を記憶実践しています。さあ、王よ、ご質問ください。わたしたちはあなたに、その聖なる転輪王の儀式を明らかにしましょう。」

そこで、王は、彼らを集会に招いて、聖なる転輪王の儀式について質問し、彼らはそれに答えたのである。

それを聞いて、王は法則にのっとった守護と防衛と保護を決めた。しかし、王は財産のない者に財産を与えることがなかったのである。

そのために、貧民が増大し、やがて、貧しさのあまり、盗みを働く者が現われ

るようになったのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

第七代までの転輪王は、その徳によって大陸を統治していたのだ。そして、この王の代になって、いわゆる「合議制政治」が出現したのである。それは今日、わたしたちがよく知る政治形態のことで

ある。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、わたしたちは今ではこの合議制こそ最高のものと思い込んでいるが、実際は必ずしもそうではないのである。

正法にのっとり、徳を背景とした転輪王のような王がこの世に現われたときこそ、真に大陸は繁栄し、人々に平安が約束されるものなのである。

したがって、わたしたちはこのような現代の錯覚にとらわれてはならないのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

このように貧民が増大したとき、ある男が、他人の与えられないものを盗みによって占有した。そこで、人々はこの者

を捕まえ、王に引き合わせた。
「王よ、この男は、他人のものを盗んだのです。」
そこで、王はその男に尋ねた。
「おい男よ、お前は他人のものを盗んだそうだが、それは本当なのか。」
「王よ、本当です。」
「どうしてだ。」
「生きていけないからです。」

そこで、王はその男に財産を与えたのである。

「お前はこの財産によって、普通に生活しなさい。父母や妻子を扶養しなさい。仕事を始めなさい。出家修行者や祭司に対しては、精神的向上を促す、天界につながるために結果的に楽を受ける、天界に生まれ変わるための、布施を確立しなさい。」

「かしこまりました。」

と、その男は王に応えたのである。

◉その三　すさむ心

その後も、このような盗人が現われ、その度に王は財産を与えたのであった。

人々はこの話を聞き、そしてこのように考えた。

「友よ、聞くところによると、他人のも

のを盗んだ者に、王は財産を与えるそうだ。」

「それならば……。」

ここで、人々の心に邪悪な思いが生じたのである。

「わたしたちも他人のものを盗もうではないか。」

そこで、人々の間に盗みがはびこるようになり、世の中はすさむようになった。

❖

そんな中で、あるとき一人の盗人が捕まったのである。

「王よ、この男は盗人です。」

彼は、王の前に引き出された。王は、その男に尋ねた。

「おい男よ、本当なのか。」

「王よ、本当です。」

「どうしてだ。」

「生きていけないからです。」

❖

そのときである。王の心にはこのような思いが生じたのである。

「もしわたしが、他人のものを盗みによって強奪した者すべてに財産を与えていたら、このような窃盗は増加するに違いない。

わたしはこの男を徹底的に拘束し、この世の中から根絶やしにしたい。そして、彼の頭を叩き割るしかない。」

と。

そこで、王は家来たちに命令した。

「家来よ、それではその男をしっかりとしたロープで手を後ろにして強く縛り、かみそりで頭の毛を短く刈り込み、激しい小太鼓によって車道から車道へ、四つ角から四つ角へと連行し、南門から出て市の南に徹底的に拘束し、根絶やしにし、彼の頭を叩き割りなさい。」

「王よ、かしこまりました。」

こうして、その男は頭を割られたのであった。

やがて、この話は人々の間に広まった。

「あの盗人は、罰を受けた。王は、他人のものを盗んだ者は徹底的に拘束し、根絶やしにし、頭を叩き割るのだ。」

そして、人々の心に、このような悪しき思いが生じたのである。

「わたしたちも鋭利な武器を持とう。そして、盗人たちを見つけたら、その頭を割ろう。」

そこで、彼らは鋭利な武器を持った。そして、村落や町の強盗を攻撃し、市や街道の強盗を攻撃した。そして、彼らは、盗人を徹底的に拘束し、根絶やしにし、次々とその頭を割ったのである。

こうして、財産のない者に財産が与え

られず、その結果貧民が増大した。そしてそのために、窃盗が増大し、武器が増大し、殺生が増大した。この殺生の増大によって、虚言が増大した。それによって、人間の寿命は縮まり、容色も徐々に悪化したのである。

こうして、八万歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には四万歳となったのである。

第八の啓示　惨劇、人類滅亡

◉その一　縮まる寿命、悪化する容色

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

このように、人間の心はどんどんとすさんでいくのである。例えばこのころ、

ある盗人が王の前に引き出される。

「王よ、この男は、他人のものを盗んだのです。」

王は尋ねた。

「おい男よ、その話は本当か。」

「違います。」

このように、男は、故意に虚言を吐くのであった。

こうして、寿命が四万歳になった人間

の世界では、財産のない者に財産が与えられず、その結果貧民が増大した。そしてこの貧民の増大に始まり、ついには虚言が増大すると、人間の寿命は縮まり、容色も徐々に悪化した。

こうして、四万歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には二万歳となったのである。

このころ、ある盗人が王の前に引き出

されると、彼は王に、

「王よ、このように呼ばれる男は、他人のものを盗んだのです。」

と、他人を中傷するのであった。

このようにして、貧民の増大に始まり、ついには中傷が増大すると、彼ら人間の寿命はさらに縮まり、容色もさらに悪くなった。そして、二万歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には一万歳となっ

たのである。

人間の寿命が一万歳のとき、ある者は美しく、ある者は醜くかった。そこで、その醜い者は、美しい者を渇望し、他人の妻と密通するようになったのである。

こうして、貧民の増大に始まり、ついには愛欲における邪悪な行為が増大すると、人間の寿命は縮み、容色もさらに悪くなった。そして、一万歳あった人間の

寿命も、その子供たちの代には五千歳となったのである。

◉その二　慈愛もなく、尊敬もなく

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

人間の寿命が五千歳のとき、二つの悪法が増大した。それは、悪口と軽薄語である。それにより、さらに寿命は縮まり、

容色も悪くなり、五千歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には二千五百歳あるいは二千歳となったのである。

人間の寿命が二千五百歳のとき、次には渇望と害心が増大した。それはまた、人間の寿命を縮ませ、容色を悪くさせ、二千五百歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には一千歳となったのである。

人間の寿命が一千歳のとき、今度は邪

悪な見解が増大した。すると、人間の寿命はさらに縮み、容色も悪化し、一千歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には五百歳となったのである。

人間の寿命が五百歳のとき、三つの悪法が増大した。それは、「真理でないものをありがたがって貪る」ということ、つり合いの取れていない切望、そして「死後の世界を否定したり、天界はない

と主張する」邪悪な法則という三つの悪法である。

この三つの悪法が増大すると、人間の寿命はいっそう縮み、容色も悪化した。それにつれて、五百歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には二百五十歳あるいは二百歳となったのである。

人間の寿命が二百五十歳のとき、人間は、父母に対する慈愛をなくし、出家修

行者や祭司に対する尊敬がなく、一族の徳の高い者に敬意を払わなくなるのである。

＊

このようにして、財産のない者に財産が与えられず、貧困が増大した。それを始まりとして、盗み・武器・殺生・虚言・中傷・愛欲における邪悪な行為・悪口と軽薄語・渇望と害心・邪悪な見解・「非法則で

❖

ある愛著（あいじゃく）・つり合いの取れていない切望・邪悪な法則」という三つの悪法・「父母に対する慈愛をなくし、出家修行者や祭司に対する尊敬がなく、一族の徳の高い者に敬意を払わなくなる」こと――これらの悪しき法則が増大し、人間の寿命は縮み、容色も悪化し、二百五十歳あった人間の寿命も、その子供たちの代には百歳となったのである。

❖

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この状態こそ、まさに今あなたが住んでいる世の中の状態であることに気付かなければならない。

あなたはこのように、邪悪な行ないの数々によって、確実に魂を落下させ、寿命を縮め、容色を悪化させ、苦しみの因を増大させてきたのである。そして、今

なお、あなたは堕ちていこうとしているのである。

そして、この先に待ち受けているもの、それは恐ろしいことである。

わたしはそれについて、これからあなたに語るのである。

◉その三　悲惨な末路

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

やがて、人間の寿命が十歳になる時があるのだ。そのとき、少女は五歳で結婚適齢期を迎える。そしてそのとき、透明なバター・新鮮なバター・ごま油・蜂蜜・砂糖・塩といったものの味が薄れるのであ

る。このときの第一の食べ物、つまり主食は、穀類なのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、これは人間に全く徳がなくなった状態を表わしているのである。

現代をよく見るがよい。人の心の働きがひどくなり、感覚器官が弱まってきている。味覚においても、聴覚においても、

下劣なほど刺激的にしなければ、もはや感じることができなくなっているではないか。「味が薄れる」とは、このようないきさつを表わしているのである。

すべて喜びも楽しみも功徳のなせるわざ、心の清らかさのなせるわざである。悪業を積み重ねた人間たちは、もはやいかなる欲楽も味わうことができなくなるのである。そして、穀類が既に現代人の

主食となっているということを考えれば、この後にわたしの話すことは、決して遠い話ではなく、まさに、あなたの近未来を予言しているということがわかるはずである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

人間の寿命が十歳のとき、十の善の要

素の蓄積のやり方はすべてが消滅し、十の不善業のやり方が極端に顕著になるのだ。そのとき、善というものはない。まして、善を行なう人などいるはずもないのだ。

さらにこのときには、父母に対する慈愛がない者、出家修行者や祭司を尊敬しない者、一族の徳の高い者に敬意を払わない者、そういう者たちが、礼遇され、

称賛されるようになるのである。

人間の寿命が十歳のとき、母というもの、母方の姉妹というもの、母方の兄弟というもの、大師の夫人というもの、教師の夫人というものがなくなり、世界はまるで、ヤギと羊、鶏と豚、犬と山犬のように堕落するのである。

そして、人間はお互いに痛烈な反感、痛烈な害心、痛烈な敵意や殺人者の心を

表わすのである。すなわち、父母は子供に、子供は父母に、兄弟・姉妹は兄弟・姉妹に、痛烈な反感、痛烈な害心、痛烈な敵意や殺人者の心を表わすのである。

たとえるならば、それは、猟師が獣を見て、そのような感情を働かせるようなものなのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

このようなことは、まさに現代に見られることである。聖なる修行者をはじめとして、本来尊敬を集めるはずの者たちがことごとく軽蔑され、人を堕落させる職業の者たちが尊敬され、それを善しとする風潮が蔓延しているのである。

そして、人間の質が悪くなり、動物化する。近親者において和合がなくなり、

邪悪心ばかりが表わされ、険悪で殺伐とした風潮が助長される。

現代の世相がまさにそうである。このような方向に進んでいる人間の未来に、幸福や自由が約束されるはずがないのだ。しかし、現代人のほとんどすべては、その末路を知らないのである。

やがて、いよいよ恐るべきときがやってくるのである。

第九の啓示　「獣」たちの最終戦争

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

人間の寿命が十歳のとき、七日間、「兵器が重大な影響を与える期間」があるのだ。そこで、人々はお互いに「獣」として認識し合うのである。

人々は鋭利な武器を手に現われ、その鋭利な武器によって、

「これが獣だ。これが獣だ。」

と、お互いに生命を奪い合い、人々の大部分はここで死に至るのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この「七日間」について、ここであな

たに説明しなければならない。

この宇宙は、創造・維持・還元（破壊）・虚空という輪廻を繰り返している。そして、この創造と還元の中間の時期に、人類が決定的な滅亡を迎える時がやってくるのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、これが、『新約聖書』の中ではハルマゲドンとして知られている最終戦争の時である。そ

して、その時期に六六六で有名な「獣」が登場することは、予言研究に興味のある者には周知のことである。

つまり、この時期、人々はお互いを「獣」として認識し合い、生命を奪い合うのである。

また、この軍事力が重大な影響を与える時期とは、ノストラダムスの有名な詩に表わされた時期のことでもあるのだ。

そして、これはまさにこの現代のことを指しているのである。それを証明するように、今や地球の寿命はちょうどその中間にあるといわれているのだ。

＊

この決定的な破滅とは、人間の悪業の実が完全に熟したことを表わしている。

このときの惨状は筆舌に尽くしがたいもので、あたかも人間界が地獄と化した

ようなすさまじさなのである。

今のまま世の中が進んでいくならば、あなたは確実にこの人類滅亡の試練を受けなければならないのだ。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、あなたはこのような事態を招いたものが何であったのかをよく考えなさい。かつて、自ら光を放ち、空中を自由に飛来していたあなたが、このようなものすごい苦しみと

悲劇を経験しなければならない原因をもう一度よく考えなさい。

心のけがれによって、そしてあなたが一つ一つ積み重ねてきた悪業によって、このような取り返しのつかない事態に陥ったのである。

あなたはここで、自己のなしている悪業の恐ろしさを十分に理解しなさい。そして、過去の自己の行ないを悔い改め、

今からでも真理にのっとった生き方を始めなさい。もし、それをなさなければ、

「なぜ、わたしはこのような苦しみを受けなければならないのか。」

という、無智な、何ら精神的向上をもたらさない愚問に心を奪われるだけである。

すべては、なしたことしか返ってこないのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

しかし、人間の中にはこのように考える者も現われるのである。

「わたしたちはだれの命も奪うまい。また、だれもわたしたちの命を奪うことはあるまい。わたしたちは草木のジャングル、林のジャングル、樹木のジャングル、渡るのが困難な川、でこぼこの岩山に入

り、野生の根が実となる食物で暮らすことにしよう。」

と彼らは考えるのである。

そこで、人々はその七日間身を隠し、野生の根が実となる食物で暮らすのである。

そして、この七日間が過ぎ、人々は身を現わすのである。

「よかった、あなたも生きていたのか。」

「友よ、あなたも生きていたのか。」

人々は集まり、お互いに抱擁し合い、祝い歌い、安心し合うのである。

第十の啓示　甦る、バラリンゴの大陸

◉その一　善き行ないの誓い

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

そのとき、生き残った人々の中にこのような考えが生じるのである。

「わたしたちは善からぬ法則を記憶実践することによって、このような悲惨な事態を招いたのだ。わたしたちは心を改め、善をなそうではないか。」

そして、人々はどのような善をなせばよいのかを検討するのである。

「まず、わたしたちは殺生をやめよう。この善法を記憶実践しよう。」

そして、彼らは殺生をやめ、この善法

を記憶実践した。それによって、人々の寿命は増大し、容色も美しさを増したのである。

そして、十歳であった人間の寿命も、その子供たちの代には二十歳となったのである。

そこで、人々はまた、このように考えるのである。

「わたしたちが、善法を記憶実践するこ

とによって、寿命は増大し、容色も美しさを増した。それならば、わたしたちは大いに善をなそうではないか。」

そこで、人々は盗みをやめ、虚言をやめ、中傷をやめ、愛欲における邪悪な行為をやめ、悪口や軽薄語をやめ、渇望や害心をやめ、邪悪な見解をやめるのである。

また、三つの邪悪な法則を捨断し、父

母に対する慈愛を持ち、出家修行者や祭司を尊敬し、一族の徳の高い者に敬意を払うようになるのである。

こうして、人間はこのような善法を記憶実践するようになるのだ。それによって人間の寿命は増大し、容色も徐々にその美しさを増したのである。

◉その二　王城「輝きの精神」

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

その結果、二十歳であった人間の寿命も、その子供たちの代には四十歳となり、四十歳となった人間の寿命も、その子供たちの代には八十歳となった。

そして、人間の寿命は善法の増大と共

に、百六十歳、三百二十歳、六百四十歳、二千歳と延びていき、やがて四万歳となった人間の寿命も、その子供たちの代には八万歳となったのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

人間の寿命が八万歳のとき、少女は五百歳で結婚適齢期を迎えるのである。

ただしこのときも、人間は心を乱す「希望」・「飢え」・「老い」という三つの病気から逃れることはできないのである。

しかし、バラリンゴの大陸は繁栄し富に富んで、村や町や王城をたくさんの熱い火山灰が降るのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、ここで「火山灰が降る」とは、仏教やヨーガでいわれる「地水火風空」という五大エレ

メントの中の火元素が強まり、水元素優位のステージから上昇していくことを象徴しているのである。

そして、あたかも葦の林やサラ草の林のように、たくさんの人々が町を往来するようになるのである。

また、このときの王城は、「輝きの精神」という名前で、かつて真理勝者サキャ神賢（釈迦牟尼）の初転法輪の地サール

ナートに程近いヴァーラーナシーとして知られたところで、繁栄し富に富んで、数多くの人々があり、人々で満ちあふれ、大量の食物があるのだ。

そして、バラリンゴの大陸には八万四千の都市が発達し、「輝きの精神」はその中の最高の王城となるのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、ヴァー

ラーナシーのある国とは、バラリンゴの大陸、つまり現在のインドである。このインドこそ、わたしたちの目安となる所なのである。なぜならば、バラリンゴの大陸の影響は当然、この日本にも及ぶからである。

今インドで、人々の寿命が縮み、騒動も頻発し続けていることは、この未来予言の示唆であるといえるのだ。

第十一の啓示　マイトレーヤ、それは慈愛の救世主

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

人間の寿命が八万歳になったとき、「輝きの精神」にサンカ（ほら貝）という名の転輪王が転生するのである。

王は七宝と四つの如意を具えている。

また、王には、それぞれが英雄であり、勇者にふさわしい肢体を持ち、敵の軍隊を粉砕する一千人以上の子供がある。そして、大洋に取り囲まれた地を、暴力や武器によることなく、法則によって人々を深く感動させ、人々に安らぎと幸福を与えるのである。

＊

またこのとき、この世にはマイトレー

ヤ（慈愛）という名前の真理勝者が転生するのである。

彼は、供養値魂、つまり供養に値する魂であり、最上正覚者、すなわち最も正しく悟れる者であり、智徳成就者、つまり智慧と徳において最高の成就をした者であり、最上善逝、最も素晴らしい転生をする者であり、世間解、世の中のことを完全に理解する者であり、無上の士

であり、丈夫調御者、すなわち一切の衆生を調御する者であり、天界の住人の師であり、覚者であり、世尊である。

そして、マイトレーヤは、天界・破滅天・神聖天と共にある世界、出家修行者や祭司・欲天や人々と共にある弟子の世界を、身の行為・言葉・心の働きによって知り、現実世界で体現し説き明かすのである。また、初めから終わりまで素晴ら

しく、意義と特質を伴った法則を指し示し、すべてが完全で欠点のない神聖行を説明するのである。

そして、彼は何千もの向煩悩滅尽多学男出家教団を引き受けるのである。

衆生よ、そして高貴なる魂よ、一説には、マイトレーヤは五十六億七千万年後に第四天界である除冷淡天からこの世に降誕し、すべての魂を済度するといわれ

ている。

しかし、仏典を詳しく検討すると、マイトレーヤは過去に「非神」、阿修羅（あしゅら）を指すホーリー・ネームを持つのである。

事実はそのとおりで、マイトレーヤは阿修羅の王の過去世を有する真理勝者なのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞

きなさい。

転輪王であるサンカは、父であるマハーパナーダ王によって着工された宮殿を建てて生活し、贈与し解放して、出家修行者・祭司・悲惨な生活をしている人・旅人・一文なし・布施を欲する者に布施をするのである。

その後、この王はマイトレーヤのもとで、髪とあごひげを剃り、赤っぽい黄色

の衣で覆い、家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送るようになるのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、わたしはここであなたに一つ秘儀を伝授しよう。

このサンカの父であるマハーパナーダ王とは、「偉大な甲高い声で笑う王」という意味なのである。

❖

この王こそ、現在チベットの政治・宗教の最高指導者であり、チベット密教ゲールク派の総帥であるダライ・ラマ法王その人なのである。

そして、衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

ここで登場する真理勝者マイトレーヤこそ、このわたしなのである。

❖

第十二の啓示　聖なる流れに身を委ねよ

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

この世の中には、多くの悪業がはびこっている。そして、長いときの中で、人々はそれを悪業とすら理解できなくなっている。

善をなさざる者はその寿命を縮め、容色を悪化させ、堕落し、善をなす者は長寿を得、美しい容色を得、至福を得る。これは、あなたがどのように考えようが、動かしがたい事実なのである。

＊

衆生よ、そして高貴なる魂よ、よく聞きなさい。

わたしは、ここで大いなる警告をあな

たに発したいと考えている。

転輪王がこの世に現われなくなり、天界からの祝福がこの人間界に注がれなくなったとき、人間は悪業を積み続け、ただひたすら、この人間の世界の下にある地獄・動物・餓鬼といった、悲惨な世界に転生する要素を蓄積するのである。

この人間界で悪業を積み、功徳を消耗した魂は来世間違いなく、そのような世

界へと堕ちていくのだ。

そして、今やまさに多くの魂がその堕落の一途をたどっているのである。

＊

この書を手にしたあなたは、わたしと少なからぬ縁によって結ばれていることであろう。

あなたは、この書に書かれた教えをしっかりと受持し、それを実践しなければな

らない。さらにそれにとどまらず、その教えを広め、多くの魂を引き上げるならば、それはあなたにとって大きな功徳となることである。

わたしは、今生多くの魂を救済するために、この世に降りてきた。しかし、わたし一人の力では、もはやこのすさんだ人間の世界を救済するのは大変難しいのである。

善をなしなさい。悪をなしてはならない。そして、その善とは、いにしえより多くの覚者によって説かれた聖なる法則に示されている。

しっかりと目を開き、現世に蔓延する多くの邪悪な観念を振り払いなさい。あなたを悪趣の世界へと導く、心に住みついた煩悩という魔を一日も早く追い払いなさい。

そして、一人でも多くの魂が真理に目覚めること、それがすべての魂の救済を願っておられるシヴァ大神、諸々の真理勝者、そして諸々の覚者方の喜びとするところなのである。

すべての魂が、聖なる流れに入り、至福の道を歩まれんことを。

久遠の道、天への道

善法の増大・悪業の捨断。それが、人類滅亡を回避する最善の道である。

その一　光の世界へ——布施の果報

◉ただ一つの世界観

それではね、今日は、仏陀釈迦牟尼（ぶっだしゃかむに）の世界観、そしてもう一つね、在家の修行者がいったいどのような心構えで修行したら良い結果が招かれるのかということと、そしてあなた方に備わっている功徳というものについてお話ししたいと考えています。

まず、仏陀釈迦牟尼は、今のオウムの『マハーヤーナ・スートラ』に書かれている三つの世界観をお持ちであった。いきなりこの話をするならば、「えっ」と思われる方がいらっしゃるかもしれない。それをどのようにして麻原は証明する

んだと、お考えになるかもしれない。

実はね、経典にこのような内容が載っているんだね。まず、わたしたちは六つの苦しみ、六つの欲望の世界からなかなか脱却できないと。これは何かというと、あなた方も知っている地獄、餓鬼、動物、人間、阿修羅、それから天界だね。この六つの世界。そして、この六つの世界を欲六界、欲望から生じる六つの世界といっているわけです。

そして、その欲六界の上に梵天（ぼんてん）の世界があると。で、この梵天を――オウムの言葉を使うならば、上位アストラル世界だとか、あるいは純粋アストラル世界だとかいっている世界、ここにブラフマンね、梵天は存在していると。

◉輪廻転生の真実

そして、経典を調べていくと、このような言葉があるんだね。

仏陀釈迦牟尼が菩提樹のもとで悟りをお開きになって、そしていろいろと瞑想をしていらっしゃった。で、梵天の中に婆伽という者がいて――これは、婆伽という名前だね――婆伽という梵天がいて、その梵天が――この梵天というのは梵天の中の梵天、つまり梵天の王なわけだけども――他の梵天に対して、

「自分は最高に素晴らしい悟りを開いた。」

と吹聴していた。それは、この世は常であると。常というのは、決して変わらない、とね。

で、それを瞑想中見てらっしゃった仏陀釈迦牟尼は、これはまずいとお思いになって、そこから梵天の世界へお飛びになった。そして婆伽に対して、

「あなたの考え方は正しくない。梵天の寿命というものはものすごく長いから、あなたは生まれたこと、そして滅することを理解おできにならないんだ。しかしあなたは、確実に死ぬんですよ。」

と。婆伽は、

「そんなことはない。」
と。
そこで、論争と神通力合戦が始まるわけだけども、それはよしとして、その後仏陀釈迦牟尼がお勝ちになって、その婆伽に対してこうお説きになるわけだね。
「梵天よ。あなたはあなたの前生である光音界をご存じか。」
光音界というのは何かというと、光と音の世界。これはわたしの体験、『マハーヤーナ』だとか、あるいは『イニシエーション』だとか、『生死を超える』だとかね、そういうものをお読みの方は理解おできになると思うけども、このアストラルよりももっと高い世界、光と音でできている世界があるんだと、ね。
「そこからあなたは生まれ変わったんだ。そして、その世界は梵天よりもっと高い世界で、寿命はもっともっと長いんだよ。」
と。
すっかり忘れ去っている婆伽は、それが理解できなかった。しかし、その後仏

陀の巧みな説法と、それから神通によって婆伽はそれを理解できたという話がある。

で、この光と音の世界、これをオウムの教義ではコーザルだということになっている。そして、それよりも、高い世界、純粋な光の世界、これを純粋コーザル世界といっている。

ということは、わたしが書いた『マハーヤーナ・スートラ』の世界観と、それから仏陀釈迦牟尼がやはり同じように経験でお感じになった世界観とは、全く同じだということになる。そして、それ以外の世界観はないんだ。

そしてわたしたちは、その世界を輪廻転生し続けているんだよということだね。

◉劇的な真理との出会い

では、どのようにしたら、わたしたちは高い世界へ生まれ変わることができるんだろうか。

ある大金持ちの長者がいた。長者というのは、今の事業家、あるいは商売をやってらっしゃる方ということができる。

この長者は大変徳のおありになる方で、暇をみては林に女性をたくさん連れていって、お酒を飲んで、まあ、戯れてらっしゃった。しかし、心はいつも空しさで満ちあふれていた。

その日も、その長者はたくさんの女性と、そして酒、ね、これを持って林に行かれた。そして戯れてらっしゃったが、ふと空しさが襲ってきて、その女性たちをおいて、

「ちょっと散歩に行ってくる。」

と言って、林の奥へ奥へと入っていかれた。

そこには、ちょうど瞑想中の仏陀釈迦牟尼がいらっしゃって、その仏陀釈迦牟尼の黄金色の輝き、これを見てね、その長者は、

「なんと素晴らしい聖者と巡り合うことができたんだろう。」

ということで、仏陀釈迦牟尼を礼拝した。そして礼拝したその長者は、教えを請うた。

その教えというのは、五戒――五戒というのは殺生をしてはいけませんよ。盗みをしてはいけませんよ。邪淫をしてはいけませんよ。そして、嘘をついてはいけませんよ。それから、酒を飲んではいけませんよという五戒を授かるわけだ。

そして、もともと徳の高かった長者は、この世の無常、すべてのものは変化するんだということを聞いて、家へ帰った。そして、自分の妻たち――四人いたわけだけど――その妻たちに宣言した。

「わたしは、今日から完全なる禁欲の生活に入る。よってお前たちは、例えばこ

こに残る者は残ってもいいし、あるいは他の人と結婚したい人は、結婚しても構わない。」

と。すると、第一夫人は申し出た。

「わたしは結婚しとうございます。」

と。まあきっと、第一夫人には性欲があったんだろうね。それで、その長者は、

「わかった。では、どのような人と結婚したいか。」

と。

「いや、それはあなたの推薦なさる、あなたの信頼なさる最も優れた方と結婚しとうございます。」

「わかった。」

ということで、自分の右腕として働いていた人を呼んでね、で、

「わたしの妻と結婚しなさい。」

という話をした。当然、右腕だった彼は恐怖した。

「いったい、わたしのご主人は何を考えていらっしゃるんだろう。」とね。しかし、もう既にそのときには、この長者には煩悩はなかったわけだね。だから長者は、

「いや、何も恐れる必要はないんだよ。あなた方二人が、一生暮らしていくだけの財産をあげるから、とにかく幸せに結婚しなさい。」

と。で、今までのいきさつを、その右腕として働いていた侍者にね、説明をして、侍者も納得して結婚した。

そして、その彼は、その後もその長者に尽くすわけだけども、その長者自身はそれから莫大なる布施を、仏陀釈迦牟尼の教団になした。そしてその後、釈迦牟尼の教団だけではなくて——昔のインドというのは大変貧しかったから——その貧しい人に対してどんどんお布施をなした。

そしてあるとき、実はその長者というのは宝石商、外国から船で宝石を買ってきて、それをインドの国内で売るという仕事をしていたわけだけども、その船が

沈んだ。それにもかかわらず、布施をやめなかった。

◉欲界を超える

そこで、仏陀釈迦牟尼の高弟たちは心配した。あのように布施を続けていれば、いつかは貧乏になってしまうと。食べられなくなってしまうと。そこで、その長老を代表してアーナンダがその長者と会って、

「布施をおやめください。このまま布施をお続けになると貧乏になってしまうから。」

と、ね。

そこで長者は何と言ったかと。

「アーナンダ様がそうおっしゃるのは不思議でなりません。わたしは一切を布施したいと考えているんです。それはなぜかというと、人の魂というものは、まず

は貧しい状態から豊かになりたいと考える。そして豊かになったならば、次はもっともっと豊かになりたいと考える。そして、一国の王になり、一国の王になった後は——次は聖転輪王だね、まあわたしは聖転輪王と言っているんだけども、要するに——徳によって治める王になりたいと考える。そしてそれを達成したならば、次はもうこの世で何もなすことはないから、髪を切り、そして僧となって出家し、解脱をしたいと考えるようになるんですよ。そのためのお手伝いが今生でできればいいんだ。そのための自分の財産なんだから。」

ということで、すべてを布施してしまう。

「それがわたしの発願なんだ。」

と。

「あー、そうでございましたか。あなたのその崇高な心を、わたしは理解できずに。」

と言って、アーナンダは赤面したわけだけども。

で、それに対して仏陀釈迦牟尼はどのようにお考えになったかというと、

「彼はもうこの欲界に生まれ変わることはない。なぜならば、欲望をすべて断じ尽くしたからである。それは、貪りもなければ、嫌悪もなければ、あるいは執着もない。あるいは無智もない。よって彼はこの六つの苦悩の世界、欲界に生まれ変わることはないんだよ。」

というふうにお説きになったっていう話があるわけだ。ここまでなせば欲界から脱却できると。

ところが、まだまだ欲望のある人は、例えばお布施をすると。そうすると、現世的に幸せになりたいんだと。あるいは来世、ね、欲望の満足できる高い世界へ生まれ変わりたいんだと。

この背景にあるものは当然欲だから、欲界へ生まれ変わる。すべては原因、それから条件によって決まるんだということ。これが真理の理論の背景となっているものだ。

◉真の菩薩の道とは

仏陀釈迦牟尼も、四つの真理をお説きになった。それは、この世はすべてが苦であると。そしてその苦しみというものは、条件によって必ず成立するんだと。そして、それを滅するための方法があるんだと。それが八つの正しい道である、という四つの真理なんだけども、その真理を根本として修行するならば、例えば先ほどの長者みたいにね、在家にいたとしても、本当の意味での高い世界へ生まれ変わることができるんだ。そして、天界、この天界もたかだか天界であるということを、あなた方は意識しなければならない。

実は、わたしもある発願をしている。それは、まだね、今あなた方に明かすべきときではないから明かさないけども、おそらくこれは現象化し、そして、すべての魂のためになるんではないかなと考えています。

そして、先ほどの長者の生き方、これがわたしは真の菩薩(ぼさつ)の道だと考えている

わけです。そしてこの中から、一人でも二人でも三人でも、できるだけ多くの人が、その真の菩薩の道を歩いてほしいなと考えています。

（八九年四月八日　金沢にて語る）

じゃ、例えばだよ、マハーモッガラーナみたいに、あるいは、ウッパラヴァンナーみたいにね、たとえ殴り殺されても、たとえ頭を叩き割られても、

「これは自己のカルマである。そして、彼らがわたしを殴り殺したことによって、わたしの、このけがらわしい肉体というものを捨てさせてくれたと。感謝すると。その偉大なる功徳によって、彼らも覚醒してくださいよ。彼らも真理に到達してくださいよ。」

というような心の持ち主がいたとしたら、あなた方は尊敬できるか。どうだ。これが、怒りの裏側にあるものだ。だから、今、九つ説いたよね。

◉無智の滅却——真理を実践するために

では最後に。ここに真理の実践があると。しかし、その真理の実践をすることによって、自分の執着を捨てなければならないと。あるいは自分の物を布施しな

ければならないと。

そして、その人は見えていないと。それを実践することによって高い世界に上がれるんだと、あるいは、次の転生は素晴らしい世界に行けるんだと。あるいは、解脱できるんだ、あるいは成就できるんだと。あるいは、怒りを捨てたことによって、同じように綺語を発さなくなったことによって、悪口をなさなかったことによって、いいかな、あるいはAさんとBさんを仲たがいさせなかったことによって、酒を飲まなかったことによって、あるいは邪淫をしなかったことによって、あるいは盗みをしなかったことによって、あるいは嘘をつかなかったことによって、あるいは殺さなかったことによって、高い世界へ行けるということがわかってるけども、例えば、そんなのは未来がわかるわけではないから知らないと。そして、いいかな、知らなかったがために、地獄へ落ちたとしようじゃないか。あるいは餓鬼へ落ちたとしようじゃないか。あるいは動物へ落ちたとしようじゃないか。このときにだよ、あなた方は、

「わたしはあのとき、あの教えを聞かなくてもこれでよかったんだ。」
と考えるだろうか、考えないだろうか。どうだ、それは。
「いや、わたしはあのときあの教えは聞かなくてもよかったんだ。」
と。
「これで幸せだ。」
と。どうだ。沈黙しているということは、考えないのかな?
「あのとき、わたしはあれでよかったんだ。」
と考えるんだ?
だから、そのためには、初めから説いた、酒も入れて十の戒をね、つまり全部で十一あるわけだね、在家と出家と今合わせているわけだから。この十一のうちの十の戒をきちんと実践すると。そして、教義を読んで、経典を読んで、真理と照らし合わせると。あるいは現象と照らし合わせることによって、それが真理であるということを直感したと。そのとき修行に入れるかどうか。この、入ってい

る人、入らない人、両方いるわけだけども、入れるかどうかということが、一番大変な、あるいは大切な戒である、無智の壊滅ということになるね。いいかな。

無智というのは何かというと、要するに真理を実際に知らないということだ。その壊滅ということだ。いいかな。

そして、あなた方がこのトータルで十一の戒を実践したならば、あなた方は当然、幸福な世界へ行けるだろうし、この世でも幸福になれるはずだよというのが、この戒の意味合いなんだ。

◉釈迦牟尼の話——役者たちの転生

一つ、偉大な、釈迦牟尼の話があるね。わたしは、釈迦牟尼の偉大さをいろいろと証明しているけども、『阿含経典』の中に〈聚落主相応〉というのがある。その中で、歌舞伎役者について法を説いていらっしゃるところがある。いいかな。

インドというのは、カースト制が昔からあって、歌舞伎役者は歌舞伎役者で、一つの村を形成している。その村を形成している村の長、つまり、一番長の人だ。この人が釈迦牟尼のところにいらっしゃったと。そうして、釈迦牟尼にこう聞いているわけだ。

「先祖代々、わたしたちは皆さんを喜ばせている、歓喜させている。だから、わたしたちは〈喜楽〉という天界へ行けるということですけども、〈吉祥〉という天界へ行けるということですけども、どうでしょうか。」

と。それを三度聞いて、釈迦牟尼は、

「わたしに、そういうことを聞いてはいけない。」

と三度返答していらっしゃる。そして、四度目に、

「じゃあ、わかった。村の長よ、話そう。昔から人間というものは、怒り、貪り、そして、無智、あるいは愚痴に覆われていた。持っていた。そして、役者というものが現われて、怒りの場面を演じると、それによって凡夫たちは、ここではこ

う怒ればいいんだなと考えて、怒りのエネルギーがいっそう強くなった。あるいは、貪りの場面を演じると、凡夫はそれを見て、ここの場面ではこう貪ればいいんだなということで、いっそう貪りが強くなった。あるいは愚痴を演じる、あるいは真理を否定する、無智を演じるということによって、凡夫は、ここの場面ではこう演技すればいいんだなと、いっそう、そのエネルギーが強くなった。

だから、村の長よ、役者は〈吉祥〉という、あるいは〈喜楽〉という地獄へ落ちるんだよ。そして、それをもっと言い換えるならば、それは地獄と動物界である。」

と言ってらっしゃるんだよ。いいかな。

じゃあ、わたしはだ、どうしてそれを証明しようとするのか。これはポイントだね。

これはちょうど、わたしの「サマディ」中だったかな、あれは『朝日』か『読売』だったと思うな、新聞にね、猿のことが書かれていたんだよ。猿には、旧型

の猿と新型の猿があると。そして、新型の猿――あれは南アメリカだったと思います――新型の猿というものはね、すごく芝居がうまいんだって。泣きまねをしたり、とにかく芝居がうまいんだそうだ。

あれ、これはおかしいね。釈迦牟尼がお説きになった、地獄の道と動物の道があるといってらっしゃるよね。ということは、彼らはわたしの魂の友である人間だったことがあるんだということだよね。で、そこで役者を演じていて、無智なるがために、そのカルマによって猿に転生したんだということがいえるわけだ。どうだ、これは。

ということはだ、一つの動物の世界において、それがあるとしたならば、もっとひどいのは、きっと地獄に落ちているだろうね。どうだ。

わたしがあなた方に提示できる例というのは、そういうことしかない。

そして、戻すよ。あなた方が十一の戒、少なくとも五つの戒をできるだけ実践したならば、他の人より少しはいい世界へ行けるだろうということを保証できよ

うね。もちろん、完璧に実践したならば、少しの罪もなさないように実践したならば、それはより高い世界へ、あなた方が飛躍する、飛翔することは間違いなかろう。いいですか。

（八八年三月二十七日　東京にて語る）

वज्जेसु भयदस्सावी समादाय सिक्खति सिक्खापदेसु। इदं खो, भिक्खवे, भिक्खुनो वण्णस्मिं।

"किं च, भिक्खवे, भिक्खुनो सुखस्मिं ? इध, भिक्खवे, भिक्खु विविच्चेव कामेहि विविच्च अकुसलेहि धम्मेहि सवितक्कं सविचारं विवेकजं पीतिसुखं पठमं[1] झानं[1] उपसम्पज्ज विहरति। वितक्कविचारानं वूपसमा ... पे० ... दुतियं झानं ... ततियं झानं ... चतुत्थं झानं उपसम्पज्ज विहरति। इदं खो, भिक्खवे, भिक्खुनो, सुखस्मिं।

"किं च, भिक्खवे, भिक्खुनो भोगस्मिं ? इध, भिक्खवे, भिक्खु मेत्तासहगतेन चेतसा एकं दिसं फरित्वा विहरति, तथा दुतियं, तथा ततियं, तथा चतुत्थं। इति उद्धमधो तिरियं सब्बधि सब्बत्तताय[2] सब्बावन्तं लोकं मेत्तासहगतेन चेतसा विपुलेन महग्गतेन अप्पमाणेन अवेरेन अब्यापज्जेन[3] फरित्वा विहरति। करुणासहगतेन चेतसा ... पे० ... मुदितासहगतेन चेतसा ... पे० ... उपेक्खासहगतेन चेतसा एकं दिसं फरित्वा विहरति, तथा दुतियं, तथा ततियं, तथा चतुत्थं। इति उद्धमधो तिरियं सब्बधि सब्बत्तताय सब्बावन्तं लोकं उपेक्खासहगतेन चेतसा विपुलेन महग्गतेन अप्पमाणेन अवेरेन अब्यापज्जेन फरित्वा विहरति। इदं खो, भिक्खवे, भिक्खुनो भोगस्मिं।

"किं च, भिक्खवे, भिक्खुनो बलस्मिं ? इध, भिक्खवे, भिक्खु आसवानं खया अनासवं चेतोविमुत्तिं पञ्ञाविमुत्तिं दिट्ठेव धम्मे सयं अभिञ्ञा सच्छिकत्वा उपसम्पज्ज विहरति। इदं खो, भिक्खवे, भिक्खुनो बलस्मिं।

३४. "नाहं, भिक्खवे, अञ्ञं एकबलं पि समनुपस्सामि यं[4] एवं दुप्पसहं—यथयिदं, भिक्खवे, मारबलं। कुसलानं, भिक्खवे, धम्मानं समादान-हेतु एवमिदं पुञ्ञं पवड्ढती" ति।

इदमवोच भगवा। अत्तमना ते भिक्खू भगवतो भासितं अभि-नन्दुं ति।

चक्कवत्तिसुत्तं निट्ठितं ततियं।

१-१. पठमज्झानं—सी०, रो०। २. सब्बधताय—सी०। ३. अब्यापज्झेन—सी०; अब्यापज्झेन—रो०। ४. रो० पोत्थके नत्थि।

ज्जित्वा[1] समणब्राह्मणकपणद्धिकवणिब्बकयाचकानं दानं दत्वा मेत्तेय्यस्स भगवतो अरहतो सम्मासम्बुद्धस्स सन्तिके केसमस्सुं ओहारेत्वा कासायानि वत्थानि अच्छादेत्वा अगारस्मा अनगारियं पब्बजिस्सति। सो एवं पब्बजितो समानो एको वूपकट्ठो अप्पमत्तो आतापी पहितत्तो विहरन्तो नचिरस्सेव– यस्सत्थाय कुलपुत्ता सम्मदेव अगारस्मा अनगारियं पब्बजन्ति तदनुत्तरं– ब्रह्मचरियपरियोसानं दिट्ठेव धम्मे सयं अभिञ्ञा सच्छिकत्वा उपसम्पज्ज विहरिस्सति।

§ ७. अत्तदीपा विहरथ धम्मदीपा

३२. "अत्तदीपा, भिक्खवे, विहरथ अत्तसरणा अनञ्ञसरणा, धम्मदीपा धम्मसरणा अनञ्ञसरणा। कथं च, भिक्खवे, भिक्खु अत्तदीपो विहरति अत्तसरणो अनञ्ञसरणो, धम्मदीपो धम्मसरणो अनञ्ञसरणो? इध, भिक्खवे, भिक्खु काये कायानुपस्सी विहरति आतापी सम्पजानो सतिमा, विनेय्य लोके अभिज्झादोमनस्सं। वेदनासु वेदनानुपस्सी ... पे० ... चित्ते चित्तानुपस्सी ... पे० ... धम्मेसु धम्मानुपस्सी विहरति आतापी सम्पजानो सतिमा, विनेय्य लोके अभिज्झादोमनस्सं। एवं खो, भिक्खवे, भिक्खु अत्तदीपो विहरति अत्तसरणो अनञ्ञसरणो, धम्मदीपो धम्मसरणो अनञ्ञसरणो।

गोचरे चरथ

३३. "गोचरे, भिक्खवे, चरथ सके पेत्तिके विसये। गोचरे, भिक्खवे, चरन्ता सके पेत्तिके विसये आयुना पि वड्ढिस्सथ वण्णेन पि वड्ढिस्सथ सुखेन पि वड्ढिस्सथ भोगेन पि वड्ढिस्सथ बलेन पि वड्ढिस्सथ।

"किं च, भिक्खवे, भिक्खुनो आयुस्मिं? इध, भिक्खवे, भिक्खु छन्दसमाधिपधानसङ्खारसमन्नागतं इद्धिपादं भावेति, विरियसमाधिपधानसङ्खारसमन्नागतं इद्धिपादं भावेति, चित्तसमाधिपधानसङ्खारसमन्नागतं इद्धिपादं भावेति, वीमंसासमाधिपधानसङ्खारसमन्नागतं इद्धिपादं भावेति। सो इमेसं चतुन्नं इद्धिपादानं भावितत्ता बहुलीकतत्ता आकङ्खमानो कप्पं वा तिट्ठेय्य कप्पावसेसं वा। इदं खो, भिक्खवे, भिक्खुनो आयुस्मिं।

"किं च, भिक्खवे, भिक्खुनो वण्णस्मिं? इध, भिक्खवे, भिक्खु सीलवा होति, पातिमोक्खसंवरसंवुतो विहरति आचारगोचरसम्पन्नो, अणुमत्तेसु

१. विस्सज्जेत्वा – रो०।

नळवनं[1] वा सरवनं[2] वा। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अयं बाराणसी केतुमती नाम राजधानी भविस्सति इद्धा चेव फीता च बहुजना च आकिण्णमनुस्सा च सुभिक्खा च। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु इमस्मिं जम्बुदीपे चतुरासीतिनगरसहस्सानि भविस्सन्ति केतुमतीराजधानीपमुखानि। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु केतुमतिया राजधानिया सङ्खो नाम राजा उप्पज्जिस्सति चक्कवत्ती धम्मिको धम्मराजा चातुरन्तो विजितावी जनपदत्थावरियप्पत्तो सत्तरतनसमन्नागतो। तस्सिमानि सत्त रतनानि भविस्सन्ति, सेय्यथिदं – चक्करतनं, हत्थिरतनं, अस्सरतनं, मणिरतनं, इत्थिरतनं, गहपतिरतनं, परिणायकरतनमेव सत्तमं। परोसहस्सं खो पनस्स पुत्ता भविस्सन्ति सूरा वीरङ्गरूपा परसेनप्पमद्दना। सो इमं पथविं सागरपरियन्तं अदण्डेन असत्थेन धम्मेन अभिविजिय अज्झावसिस्सति।

§ ६. मेत्तेय्यो नाम भगवा उप्पज्जिस्सति

३०. "असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु मेत्तेय्यो नाम भगवा लोके उप्पज्जिस्सति अरहं सम्मासम्बुद्धो विज्जाचरणसम्पन्नो सुगतो लोकविदू अनुत्तरो पुरिसदम्मसारथि सत्था देवमनुस्सानं बुद्धो भगवा, सेय्यथापाहमेतरहि[3] लोके उप्पन्नो अरहं सम्मासम्बुद्धो विज्जाचरणसम्पन्नो सुगतो लोकविदू अनुत्तरो पुरिसदम्मसारथि सत्था देवमनुस्सानं बुद्धो भगवा। सो इमं लोकं सदेवकं समारकं सब्रह्मकं सस्समणब्राह्मणिं पजं सदेवमनुस्सं सयं अभिञ्ञा सच्छिकत्वा पवेदेस्सति, सेय्यथापाहमेतरहि इमं लोकं सदेवकं समारकं सब्रह्मकं सस्समणब्राह्मणिं पजं सदेवमनुस्सं सयं अभिञ्ञा सच्छिकत्वा पवेदेमि। सो धम्मं देसेस्सति आदिकल्याणं मज्झेकल्याणं परियोसानकल्याणं सात्थं सब्यञ्जनं, केवलपरिपुण्णं परिसुद्धं ब्रह्मचरियं पकासेस्सति; सेय्यथापाहमेतरहि धम्मं देसेमि आदिकल्याणं मज्झेकल्याणं परियोसानकल्याणं सात्थं सब्यञ्जनं, केवलपरिपुण्णं परिसुद्धं ब्रह्मचरियं पकासेमि। सो अनेकसहस्सं भिक्खुसङ्घं परिहरिस्सति, सेय्यथापाहमेतरहि अनेकसतं भिक्खुसङ्घं परिहरामि।

३१. "अथ खो, भिक्खवे, सङ्खो नाम राजा, यो सो यूपो रञ्ञा महापनादेन कारापितो, तं यूपं उस्सापेत्वा अज्झावसित्वा तं दत्वा[4] विस्स-

१. नलवनं – रो०। २. सारवनं – स्या०, रो०। ३. ०पहं० – सी०। ४. ददित्वा – रो०; स्या० पोत्थके नत्थि।

यन्नून मयं अदिन्नादाना विरमेय्याम, कामेसुमिच्छाचारा विरमेय्याम, मुसावादा[1] विरमेय्याम[1], पिसुणाय वाचाय विरमेय्याम, फरुसाय वाचाय विरमेय्याम, सम्फप्पलापा विरमेय्याम, अभिज्झं पजहेय्याम, ब्यापादं पजहय्याम, मिच्छादिट्ठिं पजहेय्याम, तयो धम्मे पजहेय्याम – अधम्मरागं, विसमलोभं, मिच्छाधम्मं। यन्नून मयं मत्तेय्या अस्साम पेत्तेय्या सामञ्ञा ब्रह्मञ्ञा कुले जेट्ठापचायिनो, इदं कुसलं धम्मं समादाय वत्तेय्यामा' ति। ते मत्तेय्या भविस्सन्ति पेत्तेय्या सामञ्ञा ब्रह्मञ्ञा कुले जेट्ठापचायिनो, इदं कुसलं धम्मं समादाय वत्तिस्सन्ति।

२८. ते कुसलानं धम्मानं समादानहेतु आयुना पि वड्ढिस्सन्ति वण्णेन पि वड्ढिस्सन्ति। तेसं आयुना पि वड्ढमानानं वण्णेन पि वड्ढमानानं वीसतिवस्सायुकानं मनुस्सानं चत्तारीसवस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। चत्तारीसवस्सायुकानं मनुस्सानं असीतिवस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। असीतिवस्सायुकानं मनुस्सानं सट्ठिवस्ससतायुका पुत्ता भविस्सन्ति। सट्ठिवस्ससतायुकानं मनुस्सानं वीसतितिवस्ससतायुका पुत्ता भविस्सन्ति। वीसतितिवस्ससतायुकानं मनुस्सानं चत्तारीसछब्बस्ससतायुका पुत्ता भविस्सन्ति। चत्तारीसछब्बस्ससतायुकानं मनुस्सानं द्वेवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। द्वेवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं चत्तारिवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। चत्तारिवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं अट्ठवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। अट्ठवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं वीसतिवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। वीसतिवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं चत्तारीसवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। चत्तारीसवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं असीतिवस्ससहस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु पञ्चवस्ससतिका कुमारिका अलंपतेय्या भविस्सन्ति।

सङ्खराजउप्पत्ति

२९. "असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु तयो आबाधा भविस्सन्ति – इच्छा, अनसनं, जरा। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अयं जम्बुदीपो इद्धो चेव भविस्सति फीतो च, कुक्कुटसम्पातिका[2] गामनिगमराजधानियो[3]। असीतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अयं जम्बुदीपो अवीचि[4] मञ्ञे फुटो भविस्सति मनुस्सेहि, सेय्यथापि

१–१. स्या० पोत्थके नत्थि। २. कुक्कुटसम्पातिता – स्या०। ३. ०निगमजनपद० – सी०। ४. अवीचि – सी०।

अञ्ञमञ्ञम्हि तिब्बो आघातो पच्चुपट्ठितो भविस्सति तिब्बो ब्यापादो तिब्बो मनोपदोसो तिब्बं वधकचित्तं । मातु पि पुत्तम्हि, पुत्तस्स पि मातरि; पितु पि पुत्तम्हि, पुत्तस्स पि पितरि; भातु पि भगिनिया, भगिनिया पि भातरि तिब्बो आघातो पच्चुपट्ठितो भविस्सति तिब्बो ब्यापादो तिब्बो मनोपदोसो तिब्बं वधकचित्तं ।

२५. "दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु सत्ताहं सत्थन्तरकप्पो भविस्सति । ते अञ्ञमञ्ञम्हि मिगसञ्ञं पटिलभिस्सन्ति । तेसं तिण्हानि सत्थानि हत्थेसु पातुभविस्सन्ति । ते तिण्हेन सत्थेन 'एस मिगो, एस मिगो' ति अञ्ञमञ्ञं जीविता वोरोपेस्सन्ति[1] ।

२६. "अथ खो तेसं, भिक्खवे, सत्तानं एकच्चानं एवं भविस्सति – 'मा च मयं कञ्चि[2], मा च अम्हे कोचि । यन्नून मयं तिणगहनं वा वनगहनं वा रुक्खगहनं वा नदीविदुग्गं वा पब्बतविसमं वा पविसित्वा वनमूलफलाहारा यापेय्यामा' ति । ते तिणगहनं वा वनगहनं वा रुक्खगहनं वा नदीविदुग्गं वा पब्बतविसमं वा पविसित्वा सत्ताहं वनमूलफलाहारा यापेस्सन्ति[3] । ते तस्स[4] सत्ताहस्स अच्चयेन तिणगहना वनगहना रुक्खगहना नदीविदुग्गा पब्बतविसमा निक्खमित्वा अञ्ञमञ्ञं आलिङ्गित्वा सभागायिस्सन्ति समस्सासिस्सन्ति – 'दिट्ठा, भो, सत्ता जीवसि, दिट्ठा, भो, सत्ता जीवसी' ति ।

§ ५. सङ्खो नाम चक्कवत्ती राजा उप्पज्जिस्सति

२७. "अथ खो तेसं, भिक्खवे, सत्तानं एवं भविस्सति – 'मयं खो अकुसलानं धम्मानं समादानहेतु एवरूपं आयतं ञातिक्खयं पत्ता । यन्नून मयं कुसलं करेय्याम । किं कुसलं करेय्याम ? यन्नून मयं पाणातिपाता विरमेय्याम, इदं कुसलं धम्मं समादाय वत्तेय्यामा' ति । ते पाणातिपाता विरमिस्सन्ति, इदं कुसलं धम्मं समादाय वत्तिस्सन्ति । ते कुसलानं धम्मानं समादानहेतु आयुना पि वड्ढिस्सन्ति वण्णेन पि वड्ढिस्सन्ति । तेसं आयुना पि वड्ढमानानं वण्णेन पि वड्ढमानानं दसवस्सायुकानं मनुस्सानं वीसतिवस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति ।

"अथ खो तेसं, भिक्खवे, सत्तानं एवं भविस्सति – 'मयं खो कुसलानं धम्मानं समादानहेतु आयुना पि वड्ढाम वण्णेन पि वड्ढाम । यन्नून मयं भिय्योसोमत्ताय कुसलं करेय्याम । किं कुसलं करेय्याम ?

१. वोरोपिस्सन्ति – स्या० । २. किञ्चि – सी० । ३. यापेय्यन्ति – रो० । ४. तत्थ – सी० ।

पञ्चवस्सिका कुमारिका अलंपतेय्या भविस्सन्ति । दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु इमानि रसानि अन्तरधायिस्सन्ति, सेय्यथिदं – सप्पि नवनीतं तेलं मधु फाणितं लोणं । दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु कुद्रूसको अग्गं[1] भोजनानं[1] भविस्सति । सेय्यथापि, भिक्खवे, एतरहि सालिमंसोदनो अग्गं भोजनानं; एवमेव खो, भिक्खवे, दसवस्सायुकेसु मनुस्सेसु कुद्रूसको अग्गं भोजनानं भविस्सति ।

"दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु दस कुसलकम्मपथा सब्बेन सब्बं अन्तरधायिस्सन्ति । दस अकुसलकम्मपथा अतिवियादिप्पिस्सन्ति[2] । दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु कुसलं ति पि न भविस्सति, कुतो पन कुसलस्स कारको । दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु ये ते भविस्सन्ति अमत्तेय्या अपेत्तेय्या असामञ्ञा अब्रह्मञ्ञा न कुले जेट्ठापचायिनो, ते पुज्जा[3] च भविस्सन्ति पासंसा च । सेय्यथापि, भिक्खवे, एतरहि मत्तेञ्ञा[4] पेत्तेञ्ञा सामञ्ञा ब्रह्मञ्ञा कुले जेट्ठापचायिनो पुज्जा च पासंसा च; एवमेव खो, भिक्खवे, दसवस्सायुकेसु मनुस्सेसु ये ते भविस्सन्ति अमत्तेय्या अपेत्तेय्या असामञ्ञा अब्रह्मञ्ञा न कुले जेट्ठापचायिनो, ते पुज्जा च भविस्सन्ति पासंसा च ।

"दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु न भविस्सति माता ति वा मातुच्छा ति* वा मातुलानी ति वा आचरियभरिया ति वा गरूनं दारा[5] ति वा । सम्भेदं लोको गमिस्सति, यथा अजेळको कुक्कुटसूकरा सोण-सिङ्गाला ।

"दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु तेसं सत्तानं अञ्ञमञ्ञम्हि तिब्बो आघातो पच्चुपट्ठितो भविस्सति तिब्बो ब्यापादो तिब्बो मनोपदोसो तिब्बं वधकचित्तं । मातु पि पुत्तम्हि, पुत्तस्स पि मातरि; पितु पि पुत्तम्हि, पुत्तस्स पि पितरि ; भातु पि भगिनिया, भगिनिया पि भातरि तिब्बो आघातो पच्चुपट्ठितो भविस्सति तिब्बो ब्यापादो तिब्बो मनोपदोसो तिब्बं वधकचित्तं । सेय्यथापि, भिक्खवे, मागविकस्स मिगं दिस्वा तिब्बो आघातो पच्चुपट्ठितो होति तिब्बो ब्यापादो तिब्बो मनोपदोसो तिब्बं वधकचित्तं; एवमेव खो, भिक्खवे, दसवस्सायुकेसु मनुस्सेसु तेसं सत्तानं

१–१. अग्गभोजनं – स्या० । २. अतिव्या दिप्पिस्सन्ति – म० । ३. पूजा – स्या० । ४. मेत्तेञ्ञा – रो० । * एत्थ स्या० पोत्थके 'पिता ति वा पितुच्छा ति वा' इति अधिको पाठो दिस्सति । ५. दारो – सी० ।

दीप० – ३.

२१. "वस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु मिच्छादिट्ठि वेपुल्लमगमासि। मिच्छादिट्ठिया वेपुल्लं गताय तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं वस्ससहस्सायुकानं[1] मनुस्सानं पञ्चवस्ससतायुका पुत्ता अहेसुं।

२२. "पञ्चवस्ससतायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु तयो धम्मा वेपुल्लमगमंसु – अधम्मरागो, विसमलोभो, मिच्छाधम्मो। तीसु धम्मेसु वेपुल्लं गतेसु तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं पञ्चवस्ससतायुकानं मनुस्सानं अप्पेकच्चे अड्ढतेय्यवस्ससतायुका अप्पेकच्चे द्वेवस्ससतायुका पुत्ता अहेसुं।

"अड्ढतेय्यवस्ससतायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु इमे धम्मा वेपुल्लमगमंसु – अमत्तेय्यता, अपेत्तेय्यता, असामञ्ञता, अब्रह्मञ्ञता, न कुले जेट्ठापचायिता।

२३. "इति खो, भिक्खवे, अधनानं धने अननुप्पदीयमाने दालिद्दियं वेपुल्लमगमासि,दालिद्दिये वेपुल्लं गते अदिन्नादानं वेपुल्लमगमासि, अदिन्नादाने वेपुल्लं गते सत्थं वेपुल्लमगमासि, सत्थे वेपुल्लं गतं पाणातिपातो वेपुल्लमगमासि, पाणातिपाते वेपुल्लं गते मुसावादो वेपुल्लमगमासि, मुसावादे वेपुल्लं गते पिसुणा वाचा वेपुल्लमगमासि, पिसुणाय वाचाय वेपुल्लं गताय कामेसुमिच्छाचारो वेपुल्लमगमासि, कामेसुमिच्छाचारे वेपुल्लं गते द्वे धम्मा वेपुल्लमगमंसु – फरुसा वाचा सम्फप्पलापो च। द्वीसु धम्मेसु वेपुल्लं गतेसु अभिज्झाव्यापादा वेपुल्लमगमंसु, अभिज्झाव्यापादेसु वेपुल्लं गतेसु मिच्छादिट्ठि वेपुल्लमगमासि, मिच्छादिट्ठिया वेपुल्लं गताय तयो धम्मा वेपुल्लमगमंसु – अधम्मरागो, विसमलोभो, मिच्छाधम्मो। तीसु धम्मेसु वेपुल्लं गतेसु इमे धम्मा वेपुल्लमगमंसु – अमत्तेय्यता, अपेत्तेय्यता, असामञ्ञता, अब्रह्मञ्ञता, न कुले जेट्ठापचायिता। इमेसु धम्मेसु वेपुल्लं गतेसु तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं अड्ढतेय्यवस्ससतायुकानं मनुस्सानं वस्ससतायुका पुत्ता अहेसुं।

दसवस्सायुकसमयो

२४. "भविस्सति, भिक्खवे, सो समयो यं इमेसं मनुस्सानं दसवस्सायुका पुत्ता भविस्सन्ति। दसवस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु

१. पञ्चवस्ससहस्सायुकानं – सी०।

その二　幸福な世界に——持戒を守る

◉戒の実践——幸福への鍵

では、今日の説法に入ります。今日はね、どのようにしたら現象的に幸福になれるか、それは結局言い方を換えるならば、持戒を守るということ、あるいは持戒を守らないということ、この表裏の関係に人が幸福になる、ならないというものがあるんだよ、という話をしたいと考えるわけです。

それはどういうことかというとね、まず、ここに修行者がいたと。あるいは修行者でなくてもいい、凡夫がいたと。この人は殺生をしなかったと。全く生き物を殺さないで、そしてすべての生き物を慈しんだと。生き物を慈しむということ

は何を意味しているかというと、その背景には心の優しさというものがあるよね。だから、心の優しい人の周りには、当然、心の優しい人が集まるわけだから、この人はどうだろう、安らいだ生活が送れるだろうか、安らがない生活が送れるだろうか。どうだ。そうだね。安らいだ生活が送れる。

そうすると、今度は逆にだよ、自分に害する生き物は皆、殺してしまえと、どんどん殺したと。あるいはどんどんいじめたと。この人の心の状態というのはどういう状態だろうか。殺伐とした状態だろうか、それとも安らいだ状態だろうか。そうだね。殺伐とした状態だね。

だから、殺生をしないで、あるいは生き物を慈しむと。これを実践している人にとってはだよ、この世は安らいだ生活、安らいだ空間になるということになる。逆に、殺生をして、あるいは生き物をいじめる人にとっては、この世は殺伐とした空間ということになる。

同じこの世という空間にいながら、例えばこの殺生というね、一つの戒の実践

をなすか、なさないかによってだよ、わたしたちは安らかな生活を送ることもできるし、あるいは殺伐とした緊張の生活に放り込まれるということになるわけだ。だから、それはあなた方がどちらの道を選ぶか、あなた方が考えなければならない。これが第一だ。

◉施し——心の解放のために

では次は、ここに自分の物があって、それを施す人がいたとしよう。どんどん施す人がいたとしよう。この人は、この行為の実践によって、執着というものが落ちると思うか、落ちないと思うか。どうだ。実践をし続けているうちに落ちると思うか、落ちないと思うか、どうだ。そうだね、落ちるね、当然。

じゃあ、もう一つ聞こう。ここに、他人の物があって、それを盗んでいる人がいたとしよう。この人は周りを気にして、いつ見付かるんじゃないかと、いつ逮

捕されるんじゃないかと、あるいは、いつ人に詰め寄られて、殴られるんじゃないかという気持ちに襲われると思うか、襲われないと思うか。どうだ。そうだね、襲われるね。

そうなると、この偸盗（ちゅうとう）、盗みというものの背景に何があるかというと、盗みをしないで施した人は、心が執着から解き放たれると、安らかな状態になるということになる。では逆に、盗みをした人はどうなるかというと、その人は周りを絶えず気にしなきゃならないと。緊張の状態に追い込まれるわけです。

確かに、盗んだときに一時的に物を得て、幸福感を味わえるかもしれないけど、その裏側に心の緊張というものを得るわけだから、さあ、果たしてどちらが得だろうかという問題になる。これも、あなた方が考えなさい。これは第二の戒だね。

◉不邪淫——心を下降させないために

じゃあ次、第三の戒だ。邪淫だね。これは修行者だったら、あなた方男性も、女性も、オウムの信徒だったら経験しているはずだ。

例えば、性エネルギーを漏らした状態と、漏らさなかった状態とでは、瞑想はどちらがいい瞑想ができるかという問題だ。それからもう一つは、クンダリニーの上昇は性エネルギーを漏らした状態と、漏らさなかった状態では、どちらの方が上昇するか、どうだそれは。漏らさない方が体が熱くなるよね。漏らしたら体が冷えるよね。これが出家した修行者における、第三番目の邪淫の戒だ。

そして、在家の修行者にとってはそうではないね。じゃあ、性欲があって異性をだまして、あるいはお金を使ってセックスをしたとしようじゃないか。そのときに性的な感覚、つまり触覚的な喜びが生じると、これはOKだね。しかし、そのときに心は殺伐とすると思うか、それとも心も幸福感に浸ると思うか。どうだ、

これは。殺伐とするよね。

密教の経典ではこのようにうたわれているよね。たとえ夫婦であっても、相手が悲しみにくれているとき、たとえ恋人であっても、相手が例えば怒り狂っているとき、あるいは悲しみにくれているときにセックスをしてはいけないと。

これは何かと、何を意味しているかというと、要するに関係が深ければ深いほど心のつながりは深いわけだ。つまりアストラルとかコーザルでのデータの入れ替えが起こりやすいわけだ。

そうなると、例えば、相手が悲しみにくれていると、そのセックスをしている最中に、その悲しみが自分に移ってしまう。そして、相手が泉のように悲しみをわき出していたならば、彼女の、あるいは彼の悲しみが減らないで、二人が悲しまなきゃならなくなってしまう。二人が暗い気持ちになってしまう。怒りも同じだ、これは。だから、こういう状態のときにはセックスをしてはいけないよと。

それから、もう一つ、生理中にセックスをしてはいけない。なぜ、生理中のセッ

クスはいけないかというと、アパーナ気優位の状態になっているね。アパーナ気というのは何かというと、エネルギーを下降させるエネルギーだったね。その優位の状態でセックスをすることによって、よりいっそうアパーナ気が強くなると。

そうすると、アパーナ気が強くなると心というものは、それと連動して引き下がるからね。下の世界に落ちてしまうから、やってはいけない。いいね。

よく日本の修行者は血でけがれるとか言うんだけど、それはあり得ません。すべては気の働きで考えてください。いいね。

◉嘘をつかない——堂々と生きるために

じゃ、次は、質問しよう。いつも真実をここに語っている人がいたとしようじゃないか。この人は堂々としていると思うか、堂々としていないと思うか。どうだ。そうだね、堂々としているね。

じゃ、いつも自分の都合のいいように嘘だけをついている人がいたとしようじゃないか。この人は堂々としていられると思うか、していられないと思うか。そうだね。だから、嘘をついてはいけないよということになる。

つまり、堂々と自分はここに存在していると、そして堂々と生きたければ、人の顔色をうかがって生きたくなければ、真理を語りなさい、正しく言葉を語りなさいよと。これが第四番目の戒だ。いいかな。

◉不飲酒——五蘊をコントロールしなさい

そして、在家においては第五番目の戒、酒の戒がある。出家者においては、また違った戒があるね。

まず、在家の戒の第五番目のできるだけ酒を飲むなというのは、もうわかるよね。酒を飲むと自分の意識というものはコントロールしやすくなるか、しづらく

なるか。どうだ。しづらくなるね。だから、酒は飲むべきではないと、できるだけ。

というのはどういうことかというと、ここに真我があって、真我が自分の心、これはあるいは「識」という、意識といってもいいかもしれない、あるいは、欲求ね、欲求のコントロール、これは仏教では「行」といってるね、そしてイメージね、これは「想」といってるね、そして感覚、これは「受」といってるよね、そしてあと肉体的なものだね、肉体の動きだね、これをコントロールするためにどうしたらいいかと。これらを自由自在に操るためにはどうしたらいいかというのが、ヨーガであり、仏教であると。

そうすると、酒が入ると、この五蘊といわれている、五つの集積といわれているものがコントロールしづらくなる。つまり、修行の害であると。

じゃ、おかしいじゃないか麻原と、禅でも他の仏教でも飲んでるぞと、酒をと。いやそれは、日本の仏教は飲んでいるだろうけど、インド仏教では飲んでいない

よ。だから、わたしは日本に真理はないですよと言ったのは、そこだ。酒を飲むなら、当然コントロール不能になる。

ということはだよ、例えば、マリファナ、あるいはLSDといわれているもの、あるいは覚醒剤的なものも、あるいはタバコも害だということになるね。薬物でコントロールすることは正しくないわけだ。いいかな。

じゃ、仙道でいうところの地丹はどうだ。これも薬物だ。確かにそのとおりだ。地丹は使うよね。じゃ、何のために地丹を使うのかというと、これはエネルギーの補強のために使うんだね。だから、意味合いが違うわけだ。

つまり、覚醒させるために使うのではなくて、逆にコントロールしづらい状態でエネルギーを強める、これが地丹の狙いだからね。その負荷分、負荷というのは、例えば、あなた方が修行していて、何も持っていない状態で歩いているとしよう。そして、例えば地丹を飲むことによってエネルギーが強まる、煩悩が強まる。そうすると、あなた方は普段の状態に五キロ、十キロ、二十キロとね、負荷

重量を乗っけた形になるわけだ。その状態で歩きなさいよというのが地丹なんだね。で、その地丹のエネルギーを昇華していくのが仙道だね。

まあ、仙道というのはタントラとだいたい同じようなものだと考えてください。わたしの言っている仙道という意味合いはだよ。

じゃ、質問しよう。例えば、その地丹についての質問だけど、いいかな。例えば、普段二十キロをしょって歩いている人が、全くしょわないで道を歩くことができたら、それは楽だと思うか、それとも大変だと思うか。楽だろ。これが地丹の理論だね。

ところが今まで何もしょっていなかった人が二十キロしょったら大変だ。だから、地丹を飲んで修行を始めると大変になるんだよ、修行者は。煩悩に巻き込まれてしまってね。それで失敗して修行を挫折する人もいると。だから、この道を選択する人は、選ばれた人でなければ駄目だね。

はい、じゃあ、酒の戒までいったよね。

◉「両舌、悪口、綺語」――正しく優しい言葉を

次。人と人とを仲たがいさせてはいけないよということについては、どうだ。例えば、AさんにはBさんの悪口を言うと、BさんにはAさんの悪口を言ったら、AさんとBさんは仲たがいします。これはOKだね。で、もし、このAさんとBさんが、あなた方の発言によって仲たがいしたんだということを知ったならば、どうだろう。それは、あなた方は恨まれるだろうか、喜ばれるだろうか。恨まれるね。だから、この両舌というものをしてはいけないと。AさんとBさんを仲たがいさせてはいけないよと。

じゃあ、今度は逆にだ、AさんとBさんをあなた方が中にいて、もし取り持ったら、仲良くさせたら、それはどうだろうね。AさんとBさんが、あなたが、それをやってくれたんだとわかったとき、あなた方に対して感謝するだろうか、しないだろうか。感謝するよね。いいかな。

じゃあ、次はどうかな。ここにAさんがいて、あなた方が本当は心に悪く思っていないんだけど、悪口をペラペラとしゃべったと。そのAさんの悪口を。そのAさんは気持ちがいいだろうか、悪いだろうか。気持ちが悪いよね。

じゃ、もし、あなた方が正しい言葉で相手に優しく絶えず語りかけたとしよう。このとき、いいかな、相手はあなたに対して喜びの気持ちを持つだろうか、それとも嫌な気持ちを持つだろうか。おべっかではないんだよ。正しくって言ってるよね。正しく優しい言葉を語りかけると。これが、悪口と、不悪口の違いだね。つまり、悪口を言うなかれの背景にあるものだ。

じゃあだよ、いいかな、例えば、今、タレントの中でいろんな面白い言葉を発する人たちがいるけども、これは一見楽しいよね。どうだ。しかし、その言葉を発している人に対して、あなた方は信頼の念が持てるかどうか。どうだ。面白いとは思うけど、信頼しないんじゃないか。

もし、面白いから信頼するという人がいたら、この綺語というのはね、善とい

うことになる。そうではなくて、そういうことばっかり言っている人は、確かに遊びとしては楽しいかもしれないけども、真理という意味においては、それは尊敬できないと考えるんだったら、綺語というものは、やはり十悪の一つということになる。どうだ。やはり優しく正しく語った人の方がいいんじゃないか。あなた方が修行しようと考えたならば、尊敬しようと考えたならば。どうかな。

ここでは、一種の沈黙があるね。皆さんは面白いのが好きなのかもしれないな。じゃ、もう一つ見方を変えよう。その相手が、面白い言葉をいろいろ発しているときに、時間はどんどん過ぎていくよね。このとき、あなた方は得るものがあるか、ないか、どうだそれは。ないよね。

じゃ、定義を変えて、釈迦牟尼が説いたときからの綺語という定義を変えてしまおう。つまり、ここでは時間の浪費だから悪業であると。ね、今あなた方の感覚からいったらそれが正しいだろうから。

こういう法なんていうものは、要するにきちんと背景に真理があればよろしい。

そして、本当はね、一つの戒には、今説明したような、一つずつの意味合いではなくて、たくさんの意味合いがある。その一つずつをわたしは引っ張って、あなた方に説明している。だからまず、あなた方は、その一つを押さえなさい。そうすると、あなた方も時間があまりないわけだから、修行者としての。だから、そういう綺語を発してはいけない、聞いてはいけない。そして、優しくて丁寧な言葉、そして真理を語ると。その実践をなしなさい。いいかな、これは。そうすると、そこで七つだ。

◉貪りを離れなさい

はい、じゃ次だ。ここに物があって、例えば十人で分けるものを、これはわたしの物だと、独り占めした人がいたとしようじゃないか。この人に対して、あなた方は敵意を感じるか、それとも「ああ、この人は素晴らしい」と感じるか。わ

かるね。これが、貪りだ。

今日はすべて、あなた方と他という関係で話を説いているよ。また次の機会には違った角度で説くかもしれない。いいね。

じゃあ、ここに十個の物があって、十人いて、十個のうちの九個を皆に分け与えて、最後の一個までも九等分して、分け与えた人がいたとしようじゃないか。その人を、あなた方は素晴らしいと思うか、思わないか。どうだ。これが、貪りを離れた状態だね。

◉瞋りの滅却——菩提心を培う

じゃ、もう一つだ。ここに人がいて、理由もなく、しょっちゅう大声を出して怒鳴って怒っていたとしよう。この人に対して、「ああ、この人は素晴らしい、尊敬できる」と考えるか。どうだ。

परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियि। तमेनं अञ्ञतरो पुरिसो रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स आरोचेसि– 'इत्थन्नामो, देव, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी', ति पेसुञ्ञमकासि।

१७. "इति खो, भिक्खवे, अधनानं धने अननुप्पदीयमाने दालिद्दियं वेपुल्लमगमासि, दालिद्दिये वेपुल्लं गते अदिन्नादानं वेपुल्लमगमासि, अदिन्नादाने वेपुल्लं गते सत्थं वेपुल्लमगमासि, सत्थे वेपुल्लं गते पाणातिपातो वेपुल्लमगमासि, पाणातिपाते वेपुल्लं गते मुसावादो वेपुल्लमगमासि, मुसावादे वेपुल्लं गते, पिसुणा वाचा वेपुल्लमगमासि, पिसुणाय वाचाय वेपुल्लं गताय तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं वीसतिवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं दसवस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं।

"दसवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु एकिदं सत्ता वण्णवन्तो[1] होन्ति, एकिदं सत्ता दुब्बण्णा। तत्थ ये ते सत्ता दुब्बण्णा ते वण्णवन्ते सत्ते अभिज्झायन्ता परेसं दारेसु चारित्तं आपज्जिंसु।

१८. "इति खो, भिक्खवे, अधनानं धने अननुप्पदीयमाने दालिद्दियं वेपुल्लमगमासि, दालिद्दिये वेपुल्लं गते ... पे० ... कामेसुमिच्छाचारो वेपुल्लं गते तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं दसवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं पञ्चवस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं।

१९. "पञ्चवस्ससाहस्सयुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु द्वे धम्मा वेपुल्लमगमंसु – फरुसावाचा सम्फप्पलापो च। द्वीसु धम्मेसु वेपुल्लं गतेसु तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं पञ्चवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं अप्पेकच्चे अड्ढतेय्यवस्ससहस्सायुका अप्पेकच्चे द्वेवस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं।

२०. "अड्ढतेय्यवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अभिज्झाब्यापादा[2] वेपुल्लमगमंसु। अभिज्झाब्यापादेसु वेपुल्लं गतेसु तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि। तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं अड्ढतेय्यवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं वस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं।

---

१. वण्णवन्ता – स्या०। २. ० ब्यापादो – रो०; ब्यापादा – सी०।

करोति, सीसानि तेसं छिन्दती' ति । सुत्वान तेसं एतदहोसि– 'यन्नून मयं पि तिण्हानि सत्थानि कारापेस्साम', तिण्हानि सत्थानि कारापेत्वा येसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियिस्साम ते सुनिसेधं निसेधेस्साम, मूलघच्चं करिस्साम, सीसानि तेसं छिन्दिस्सामा' ति । ते तिण्हानि सत्थानि कारापेसुं, तिण्हानि सत्थानि कारापेत्वा गामघातं पि उपक्कमिंसु कातुं, निगमघातं पि उपक्कमिंसु कातुं, नगरघातं पि उपक्कमिंसु कातुं, पन्थदूहनं[2] पि उपक्कमिंसु कातुं। येसं ते अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियन्ति ते सुनिसेधं निसेधेन्ति, मूलघच्चं करोन्ति, सीसानि तेसं छिन्दन्ति ।

१५. "इति खो, भिक्खवे, अधनानं धने अननुप्पदीयमाने दालिद्दियं वेपुल्लमगमासि, दालिद्दिये वेपुल्लं गते अदिन्नादानं वेपुल्लमगमासि, अदिन्नादाने वेपुल्लं गते सत्थं वेपुल्लमगमासि, सत्थे वेपुल्लं गते पाणातिपातो वेपुल्लमगमासि, पाणातिपाते वेपुल्लं गते तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि । तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं असीतिवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं चत्तारीसवस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं ।

"चत्तारीसवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अञ्ञतरो पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियि । तमेनं अग्गहेसुं । गहेत्वा रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स दस्सेसुं– 'अयं, देव, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति । एवं वुत्ते, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तं पुरिसं एतदवोच– 'सच्चं किर त्वं, अम्भो पुरिस, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति ? 'न हि, देवा' ति सम्पजानमुसा अभासि[3] ।

१६. "इति खो, भिक्खवे, अधनानं धने अननुप्पदीयमानें[4] दालिद्दियं वेपुल्लमगमासि, दालिद्दिये वेपुल्लं गते अदिन्नादानं वेपुल्लमगमासि, अदिन्नादाने वेपुल्लं गते सत्थं वेपुल्लमगमासि, सत्थे वेपुल्लं गते पाणातिपातो वेपुल्लमगमासि, पाणातिपाते वेपुल्लं गते मुसावादो वेपुल्लमगमासि, मुसावादे वेपुल्लं गते तेसं सत्तानं आयु पि परिहायि वण्णो पि परिहायि । तेसं आयुना पि परिहायमानानं वण्णेन पि परिहायमानानं चत्तारीसवस्ससहस्सायुकानं मनुस्सानं वीसतिवस्ससहस्सायुका पुत्ता अहेसुं ।

"वीसतिवस्ससहस्सायुकेसु, भिक्खवे, मनुस्सेसु अञ्ञतरो पुरिसो

---

१. कारापेय्याम – स्या०, रो० । २. पन्थदूहणं – स्या०; पन्थदुहनं – म० । ३. भासि – स्या० । ४. नानुप्पदियमाने – स्या०; अननुप्पदियमाने – म० ।

संवत्तनिकं' ति । 'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, सो पुरिसो रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स पच्चस्सोसि ।

१३. "अस्सोसुं खो, भिक्खवे, मनुस्सा– 'ये किर, भो, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियन्ति तेसं राजा धनमनुप्पदेती'" ति । सुत्वान तेसं एतदहोसि– 'यन्नून मयं पि परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियेय्यामा' ति । अथ खो, भिक्खवे, अञ्ञतरो पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियि । तमेनं अग्गहेसुं । गहेत्वा रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स दस्सेसुं– 'अयं, देव, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति । एवं वुत्ते, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तं पुरिसं एतदवोच– 'सच्चं किर त्वं, अम्भो पुरिस, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति ?

'सच्चं, देवा' ति ।

'किंकारणा' ति ?

'न हि, देव, जीवामी' ति ।

"अथ खो, भिक्खवे, रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स एतदहोसि– 'सचे खो अहं यो यो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियिस्सति तस्स तस्स धनमनुप्पदस्सामि, एवमिदं अदिन्नादानं पवड्ढिस्सति । यन्नूनाहं इमं पुरिसं सुनिसेधं निसेधेय्यं, मूलघच्चं[2] करेय्यं, सीसमस्स छिन्देय्यं' ति । अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो पुरिसे आणापेसि– 'तेन हि, भणे, इमं पुरिसं दब्भाय रज्जुया पच्छाबाहं[3] गाळ्हबन्धनं बन्धित्वा खुरमुण्डं करित्वा खरस्सरेन पणवेन रथिकाय[4] रथिकं[5] सिङ्घाटकेन सिङ्घाटकं परिनेत्वा दक्खिणेन द्वारेन निक्खमित्वा दक्खिणतो नगरस्स सुनिसेधं निसेधेथ, मूलघच्चं करोथ, सीसमस्स छिन्दथा' ति । 'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, ते पुरिसा रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स पटिस्सुत्वा तं पुरिसं दब्भाय रज्जुया पच्छाबाहं गाळ्हबन्धनं बन्धित्वा खुरमुण्डं करित्वा खरस्सरेन पणवेन रथिकाय रथिकं सिङ्घाटकेन सिङ्घाटकं परिनेत्वा दक्खिणेन द्वारेन निक्खमित्वा दक्खिणतो नगरस्स सुनिसेधं निसेधेसुं, मूलघच्चं अकंसु, सीसमस्स छिन्दिंसु ।

१४. "अस्सोसुं खो, भिक्खवे, मनुस्सा– 'ये किर, भो, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियन्ति ते राजा सुनिसेधं निसेधेति, मूलघच्चं

---

१. धनमनुप्पदेती – रो० । २. मूलघच्चं – स्या०; मूलच्छेज्जं – सी० । ३ पच्छाबाहं – स्या० । ४. रथियाय – स्या०, रो०; रथिया – सी० । ५. रथियं – स्या०, रो०; रथि – सी० ।

च खो अधनानं धनमनुप्पदासि[1]। अधनानं धने अननुप्पदीयमाने दालिद्दियं[2] वेपुल्लमगमासि। दालिद्दिये वेपुल्लं गते अञ्ञतरो पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियि। तमेनं अग्गहेसुं। गहेत्वा रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स दस्सेसुं – 'अयं, देव, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति। एवं वुत्ते, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तं पुरिसं एतदवोच– 'सच्चं किर त्वं, अम्भो पुरिस, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी[3]" ति ?

'सच्चं, देवा' ति।

'किंकारणा' ति ?

'न हि, देव, जीवामी' ति।

"अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तस्स पुरिसस्स धनमनुप्पदासि– 'इमिना त्वं, अम्भो पुरिस, धनेन अत्तना च जीवाहि, मातापितरो च पोसेहि, पुत्तदारं च पोसेहि, कम्मन्ते च पयोजेहि, समण-ब्राह्मणेसु उद्धग्गिकं दक्खिणं पतिट्ठापेहि सोवग्गिकं सुखविपाकं सग्गसंवत्तनिकं' ति। 'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, सो पुरिसो रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स पच्चस्सोसि।

"अञ्ञतरो पि खो, भिक्खवे, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियि। तमेनं अग्गहेसुं। गहेत्वा रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स दस्सेसुं– 'अयं, देव, पुरिसो परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति। एवं वुत्ते, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तं पुरिसं एतदवोच–

'सच्चं किर त्वं, अम्भो पुरिस, परेसं अदिन्नं थेय्यसङ्खातं आदियी' ति ?

'सच्चं, देवा' ति।

'किंकारणा' ति ?

'न हि, देव, जीवामी' ति।

"अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तस्स पुरिसस्स धनमनुप्पदासि– 'इमिना त्वं, अम्भो पुरिस, धनेन अत्तना च जीवाहि, मातापितरो च पोसेहि, पुत्तदारं च पोसेहि, कम्मन्ते च पयोजेहि, समण-ब्राह्मणेसु उद्धग्गिकं दक्खिणं पतिट्ठापेहि[4] सोवग्गिकं सुखविपाकं सग्ग-

१. धनमनुप्पादासि – सी०। २. दाळिद्दियं – सी०, स्या०; दलिद्दियं – रो०। ३. आदियसी – स्या०। ४. पतिट्ठपेहि – सी०, स्या०।

परियेसितुं । एहि त्वं, तात कुमार, इमं समुद्दपरियन्तं पथविं पटिपज्ज । अहं पन केसमस्सुं ओहारेत्वा कासायानि वत्थानि अच्छादेत्वा अगारस्मा अनगारियं पब्बजिस्सामी' ति ।

"अथ खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती जेट्ठपुत्तं कुमारं साधुकं रज्जे समनुसासित्वा केसमस्सुं ओहारेत्वा कासायानि वत्थानि अच्छादेत्वा अगारस्मा अनगारियं पब्बजि । सत्ताहपब्बजिते खो पन, भिक्खवे, राजिसिम्हि दिब्बं चक्करतनं अन्तरधायि ।

११. "अथ खो, भिक्खवे, अञ्ञतरो पुरिसो येन राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा राजानं खत्तियं मुद्धाभिसित्तं एतदवोच– 'यग्घे, देव, जानेय्यासि, दिब्बं चक्करतनं अन्तरहितं' ति ? अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो दिब्बे चक्करतने अन्तरहिते अनत्तमनो अहोसि, अनत्तमनतं च पटिसंवेदेसि; नो च खो राजिसिं उपसङ्कमित्वा अरियं चक्कवत्तिवत्तं पुच्छि । सो समतेनेव सुदं जनपदं पसासति । तस्स समतेन जनपदं पसासतो पुब्बेनापरं[1] जनपदा न पब्बन्ति[2], यथा तं पुब्बकानं राजूनं अरिये चक्कवत्तिवत्ते वत्तमानानं ।

"अथ खो, भिक्खवे, अमच्चा पारिसज्जा गणकमहामत्ता अनीकट्ठा दोवारिका मन्तस्साजीविनो सन्निपतित्वा राजानं खत्तियं मुद्धाभिसित्तं* एतदवोचुं– 'न खो ते, देव, समतेन सुदं' जनपदं पसासतो पुब्बेनापरं जनपदा पब्बन्ति, यथा तं पुब्बकानं राजूनं अरिये चक्कवत्तिवत्ते वत्तमानानं । संविज्जन्ति खो ते, देव, विजिते अमच्चा पारिसज्जा गणकमहामत्ता अनीकट्ठा दोवारिका मन्तस्साजीविनो मयञ्चेव अञ्ञे च ये मयं अरियं चक्कवत्तिवत्तं धारेम । इच्छ त्वं, देव, अम्हे अरियं चक्कवत्तिवत्तं पुच्छ । तस्स ते मयं अरियं चक्कवत्तिवत्तं पुट्ठा ब्याकरिस्सामा' ति ।

§ ४. दारिद्रिये वेपुल्लं गते

१२. "अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो अमच्चे पारिसज्जे गणकमहामत्ते अनीकट्ठे दोवारिके मन्तस्साजीविनो सन्निपातेत्वा अरियं चक्कवत्तिवत्तं पुच्छि । तस्स ते अरियं चक्कवत्तिवत्तं पुट्ठा ब्याकरिंसु । तेसं सुत्वा धम्मिकञ्हि खो रक्खावरणगुत्तिं संविदहि, नो

१. न पुब्बे नापरं – रो० । २. पब्बन्ति – स्या० । * एत्थ सी०, रो० पोत्थकेसु 'उपसङ्कमित्वा' इति अधिको पाठो विज्जति । ३. रो० पोत्थके नत्थि ।

चतुरङ्गिनिया सेनाय। यस्मिं खो पन, भिक्खवे, पदेसे दिब्बं[1] चक्करतनं पतिट्ठासि, तत्थ राजा चक्कवत्ती वासं उपगच्छि सद्धिं चतुरङ्गिनिया सेनाय। ये खो पन, भिक्खवे, उत्तराय दिसाय पटिराजानो ते राजानं चक्कवत्तिं उपसङ्कमित्वा एवमाहंसु – 'एहि खो, महाराज। स्वागतं ते, महाराज। सकं ते, महाराज। अनुसास, महाराजा' ति। राजा चक्कवत्ती एवमाह – 'पाणो न हन्तब्बो, अदिन्नं नादातब्बं, कामेसुमिच्छा न चरितब्बा, मुसा न भासितब्बा, मज्जं न पातब्बं, यथाभुत्तं च भुञ्जथा' ति। ये खो पन, भिक्खवे, उत्तराय दिसाय पटिराजानो ते रञ्ञो चक्कवत्तिस्स अनुयन्ता अहेसुं।

"अथ खो तं, भिक्खवे, चक्करतनं समुद्दपरियन्तं पथविं[2] अभिविजिनित्वा तमेव राजधानिं पच्चागन्त्वा रञ्ञो चक्कवत्तिस्स अन्तेपुरद्वारे अत्थकरणपमुखे[3] अक्खाहतं मञ्ञे अट्ठासि, रञ्ञो चक्कवत्तिस्स अन्तेपुरं उपसोभयमानं।

९. "दुतियो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती...पे०...ततियो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती...चतुत्थो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती ...पञ्चमो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती...छट्ठो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती...सत्तमो पि खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती बहुन्नं वस्सानं बहुन्नं वस्ससतानं बहुन्नं वस्ससहस्सानं अच्चयेन अञ्ञतरं पुरिसं आमन्तेसि– 'यदा त्वं, अम्भो पुरिस, पस्सेय्यासि दिब्बं चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं, अथ मे आरोचेय्यासी' ति। 'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, सो पुरिसो रञ्ञो चक्कवत्तिस्स पच्चस्सोसि। अद्दसा खो, भिक्खवे, सो पुरिसो बहुन्नं वस्सानं बहुन्नं वस्ससतानं बहुन्नं वस्ससहस्सानं अच्चयेन दिब्बं चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं। दिस्वान येन राजा चक्कवत्ती तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा राजानं चक्कवत्तिं एतदवोच–'यग्घे, देव, जानेय्यासि, दिब्बं ते चक्करतनं ओसक्कितं, ठाना चुतं' ति?

१०. "अथ खो, भिक्खवे, राजा चक्कवत्ती जेट्ठपुत्तं कुमारं आमन्तापेत्वा एतदवोच–'दिब्बं किर मे, तात कुमार, चक्करतनं ओसक्कितं, ठाना चुतं। सुतं खो पन मेतं– यस्स रञ्ञो चक्कवत्तिस्स दिब्बं चक्करतनं ओसक्कति, ठाना चवति, न दानि तेन रञ्ञा चिरं जीवितब्बं होती ति। भुत्ता खो पन मे मानुसका कामा। समयो दानि मे दिब्बे कामे

१. स्या०, रो० पोत्थकेसु नत्थि। २. पठविं – स्या०, रो०। ३. अट्ठकरणप्पमुखे – सी०।

"अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो उट्ठायासना एकंसं उतरासङ्गं करित्वा वामेन हत्थेन भिङ्कारं गहेत्वा दक्खिणेन हत्थेन चक्करतनं अब्भुक्किरि – 'पवत्ततु भवं चक्करतनं, अभिविजिनातु भवं चक्करतनं' ति।

"अथ खो तं, भिक्खवे, चक्करतनं पुरत्थिमं दिसं पवत्ति, अन्वदेव राजा चक्कवत्ती सद्धिं चतुरङ्गिनिया सेनाय। यस्मिं खो पन, भिक्खवे, पदेसे चक्करतनं पतिट्ठासि तत्थ राजा चक्कवत्ती[1] वासं उपगच्छि[2] सद्धिं चतुरङ्गिनिया सेनाय। ये खो पन, भिक्खवे, पुरत्थिमाय दिसाय पटिराजानो ते राजानं चक्कवत्तिं उपसङ्कमित्वा एवमाहंसु – 'एहि खो, महाराज। स्वागतं[3] ते[4], महाराज। सकं ते, महाराज। अनुसास, महाराजा' ति। राजा चक्कवत्ती एवमाह – 'पाणो न हन्तब्बो, अदिन्नं नादातब्बं, कामेसुमिच्छा न चरितब्बा, मुसा न भासितब्बा, मज्जं न पातब्बं, यथाभुत्तं च भुञ्जथा' ति। ये खो पन, भिक्खवे, पुरत्थिमाय दिसाय पटिराजानो ते रञ्ञो चक्कवत्तिस्स अनुयन्ता अहेसुं।

७. "अथ खो तं, भिक्खवे, चक्करतनं पुरत्थिमं समुद्दं अज्झोगाहेत्वा[5] पच्चुत्तरित्वा दक्खिणं दिसं पवत्ति ...पे०... दक्खिणं समुद्दं अज्झोगाहेत्वा पच्चुत्तरित्वा पच्छिमं दिसं पवत्ति, अन्वदेव राजा चक्कवत्ती सद्धिं चतुरङ्गिनिया सेनाय। यस्मिं खो पन, भिक्खवे, पदेसे दिब्बं चक्करतनं पतिट्ठासि, तत्थ राजा चक्कवत्ती वासं उपगच्छि सद्धिं चतुरङ्गिनिया सेनाय। ये खो पन, भिक्खवे, पच्छिमाय दिसाय पटिराजानो ते राजानं चक्कवत्तिं उपसङ्कमित्वा एवमाहंसु – 'एहि खो, महाराज। स्वागतं ते, महाराज। सकं ते, महाराज। अनुसास, महाराजा' ति। राजा चक्कवत्ती एवमाह – 'पाणो न हन्तब्बो, अदिन्नं नादातब्बं, कामेसुमिच्छा न चरितब्बा, मुसा न भासितब्बा, मज्जं न पातब्बं, यथाभुत्तं च भुञ्जथा' ति। ये खो पन, भिक्खवे, पच्छिमाय दिसाय पटिराजानो ते रञ्ञो चक्कवत्तिस्स अनुयन्ता[6] अहेसुं।

८. "अथ खो तं, भिक्खवे, चक्करतनं पच्छिमं समुद्दं अज्झोगाहेत्वा पच्चुत्तरित्वा उत्तरं दिसं पवत्ति, अन्वदेव राजा चक्कवत्ती सद्धिं

---

१. चक्कवत्ति – स्या०, रो०। २. उपगच्छि – सी०। ३. सागतं – रो०। ४. स्या० पोत्थके नत्थि। ५. अज्झोगहेत्वा – सी०, रो०, स्या०। ६. अनुयुत्ता – रो०; अनुयन्ता – सी०। दीघ० – ३.

उपोसथिकस्स उपरिपासादवरगतस्स दिब्बं चक्करतनं पातुभविस्सति सहस्सारं सनेमिकं सनाभिकं सब्बाकारपरिपूरं' ति ।

§२. चक्कवत्तिअरियवत्तं

५. 'कतमं पन तं, देव, अरियं चक्कवत्तिवत्तं' ति ?

'तेन हि त्वं, तात, धम्मं येव निस्साय धम्मं सक्करोन्तो धम्मं गरुं करोन्तो धम्मं मानेन्तो धम्मं पूजेन्तो धम्मं अपचायमानो धम्मद्धजो धम्मकेतु धम्माधिपतेय्यो धम्मिकं रक्खावरणगुत्तिं संविदहस्सु अन्तोजनस्मिं बलकायस्मिं खत्तियेसु अनुयन्तेसु[1] ब्राह्मणगहपतिकेसु नेगमजानपदेसु समणब्राह्मणेसु मिगपक्खीसु। मा च ते, तात, विजिते अधम्मकारो पवत्तित्थ। ये च ते, तात, विजिते अधना अस्सु[2] तेसं च धनमनुप्पदेय्यासि । ये च ते, तात, विजिते समणब्राह्मणा मदप्पमादा पटिविरता खन्तिसोरच्चे निविट्ठा एकमत्तानं दमेन्ति एकमत्तानं समेन्ति एकमत्तानं परिनिब्बापेन्ति, ते कालेन कालं उपसङ्कमित्वा परिपुच्छेय्यासि परिपञ्हेय्यासि'– किं, भन्ते, कुसलं, किं अकुसलं, किं सावज्जं, किं अनवज्जं, किं सेवितब्बं, किं न सेवितब्बं, किं मे करीयमानं[3] दीघरत्तं अहिताय दुक्खाय अस्स, किं वा पन मे करीयमानं दीघरत्तं हिताय सुखाय अस्सा ति ? तेसं सुत्वा यं अकुसलं तं अभिनिवज्जेय्यासि, यं कुसलं तं समादाय वत्तेय्यासि । इदं खो, तात, तं अरियं चक्कवत्तिवत्तं' ति ।

§३. चक्करतनं

६. "'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो राजिसिस्स पटिस्सुत्वा अरिये चक्कवत्तिवत्ते वत्ति । तस्स अरिये चक्कवत्तिवत्ते वत्तमानस्स तदहुपोसथे पन्नरसे सीसंन्हातस्स उपोसथिकस्स उपरिपासादवरगतस्स दिब्बं चक्करतनं पातुरहोसि सहस्सारं सनेमिकं सनाभिकं सब्बाकारपरिपूरं । दिस्वान रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स एतदहोसि– 'सुतं खो पन मेतं– यस्स रञ्ञो खत्तियस्स मुद्धाभिसित्तस्स तदहुपोसथे पन्नरसे सीसंन्हातस्स उपोसथिकस्स उपरिपासादवरगतस्स दिब्बं चक्करतनं पातुभवति सहस्सारं सनेमिकं सनाभिकं सब्बाकारपरिपूरं, सो होति राजा चक्कवत्ती ति । अस्सं नु खो अहं राजा चक्कवत्ती' ति ।

---

१. अनुयन्तेसु – सी०; अनुयुत्तेसु – रो० । २. स्या० पोत्थके नत्थि । ३. परिग्गहेय्यासि – म०; रो० पोत्थके नत्थि । ४. करियमानं – सी०, स्या०; कयिरमानं – रो० ।

पुरिसो रञ्ञो दळ्हनेमिस्स पञ्चस्सोसि। अद्दसा खो, भिक्खवे, सो पुरिसो बहुन्नं वस्सानं बहुन्नं वस्ससतानं बहुन्नं वस्ससहस्सानं अच्चयेन दिब्बं चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं। दिस्वान येन राजा दळ्हनेमि तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा राजानं दळ्हनेमिं एतदवोच – 'यग्घे, देव, जानेय्यासि, दिब्बं ते चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं' ति। अथ खो, भिक्खवे, राजा दळ्हनेमि जेट्ठपुत्तं कुमारं आमन्तापेत्वा[1] एतदवोच – 'दिब्बं किर मे, तात कुमार, चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं। सुतं खो पन मेतं–यस्स रञ्ञो चक्कवत्तिस्स दिब्बं चक्करतनं ओसक्कति ठाना चवति, न दानि तेन रञ्ञा चिरं जीवितब्बं होती ति। भुत्ता खो पन मे मानुसका[2] कामा। समयो दानि मे दिब्बे कामे परियेसितुं। एहि त्वं, तात कुमार, इमं समुद्दपरियन्तं पथविं पटिपज्ज। अहं पन केसमस्सुं ओहारेत्वा कासायानि वत्थानि अच्छादेत्वा अगारस्मा अनगारियं पब्बजिस्सामी' ति।

४. "अथ खो, भिक्खवे, राजा दळ्हनेमि जेट्ठपुत्तं कुमारं साधुकं रज्जे समनुसासित्वा केसमस्सुं ओहारेत्वा कासायानि वत्थानि अच्छादेत्वा अगारस्मा अनगारियं पब्बजि। सत्ताहपब्बजिते खो पन, भिक्खवे, राजिसिम्हि दिब्बं चक्करतनं अन्तरधायि।

"अथ खो, भिक्खवे, अञ्ञतरो पुरिसो येन राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो[3] तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा राजानं खत्तियं मुद्धाभिसित्तं एतदवोच – 'यग्घे, देव, जानेय्यासि, दिब्बं चक्करतनं अन्तरहितं' ति! अथ खो, भिक्खवे, राजा खत्तियो मुद्धाभिसित्तो दिब्बे चक्करतने अन्तरहिते अनत्तमनो अहोसि, अनत्तमनतं च पटिसंवेदेसि। सो येन राजिसि तेनुपसङ्कमि; उपसङ्कमित्वा राजिसिं एतदवोच – 'यग्घे, देव, जानेय्यासि, दिब्बं चक्करतनं अन्तरहितं' ति! एवं वुत्ते, भिक्खवे, राजिसि राजानं खत्तियं मुद्धाभिसित्तं एतदवोच – 'मा खो त्वं, तात, दिब्बे चक्करतने अन्तरहिते अनत्तमनो अहोसि, मा[4] अनत्तमनतं च पटिसंवेदेसि[5]। न हि ते, तात, दिब्बं चक्करतनं पेत्तिकं दायज्जं। इच्छ त्वं, तात, अरियं चक्कवत्तिवत्तं वत्ताहि। ठानं खो पनेतं विज्जति यं ते अरियं चक्कवत्तिवत्तं वत्तमानस्स तदहुपोसथे पन्नरसे सीसंन्हातस्स

---

१. आमन्तेत्वा – सी०, स्या०। २. मानुसिका – सी०। ३. मुद्धावसित्तो – स्या०, रो०। ४. स्या०, रो० .त्थकेसु नत्थि। ५. पटिसंवेदेहि – सी०।

३. चक्कवत्तिसुत्तं[1]

१. एवं मे सुतं । एकं समयं भगवा मगधेसु विहरति मातुलायं । तत्र खो भगवा भिक्खू आमन्तेसि – "भिक्खवो" ति । "भद्दन्ते" ति ते भिक्खू भगवतो पच्चस्सोसुं । भगवा एतदवोच – "अत्तदीपा, भिक्खवे, विहरथ अत्तसरणा अनञ्ञसरणा, धम्मदीपा धम्मसरणा अनञ्ञसरणा । कथं च पन, भिक्खवे, भिक्खु अत्तदीपो विहरति अत्तसरणो अनञ्ञसरणो, धम्मदीपो धम्मसरणो अनञ्ञसरणो ? इध, भिक्खवे, भिक्खु काये कायानुपस्सी विहरति आतापी सम्पजानो सतिमा, विनेय्य लोके अभिज्झा-दोमनस्सं।वेदनासु वेदनानुपस्सी...पे०...चित्ते चित्तानुपस्सी...पे०...धम्मेसु धम्मा-नुपस्सी विहरति आतापी सम्पजानो सतिमा, विनेय्य लोके अभिज्झादोमनस्सं । एवं खो, भिक्खवे, भिक्खु अत्तदीपो विहरति अत्तसरणो अनञ्ञसरणो, धम्मदीपो धम्मसरणो अनञ्ञसरणो ।

"गोचरे, भिक्खवे, चरथ सके पेत्तिके विसये । गोचरे, भिक्खवे, चरतं सके पेत्तिके विसये न लच्छति मारो ओतारं, न लच्छति मारो आरम्मणं । कुसलानं, भिक्खवे, धम्मानं समादानहेतु एवमिदं पुञ्ञं पवड्ढति ।

§ १. दळ्हनेमिचक्कवत्तिराजा

२. "भूतपुब्बं, भिक्खवे, राजा दळ्हनेमि[2] नाम अहोसि चक्कवत्ती धम्मिको धम्मराजा चातुरन्तो विजितावी जनपदत्थावरियप्पत्तो सत्तरतन-समन्नागतो । तस्सिमानि सत्त रतनानि अहेसुं, सेय्यथिदं – चक्करतनं, हत्थिरतनं, अस्सरतनं, मणिरतनं, इत्थिरतनं, गहपतिरतनं, परिणायक-रतनमेव सत्तमं । परोसहस्सं खो पनस्स पुत्ता अहेसुं सूरा वीरङ्गरूपा परसेनप्पमद्दना । सो इमं पथविं सागरपरियन्तं अदण्डेन असत्थेन धम्मेन[3] अभिविजिय अज्झावसि ।

३. "अथ खो, भिक्खवे, राजा दळ्हनेमि बहुन्नं वस्सानं बहुन्नं वस्ससतानं बहुन्नं वस्ससहस्सानं अच्चयेन अञ्ञतरं पुरिसं आमन्तेसि – 'यदा त्वं, अम्भो पुरिस, पस्सेय्यासि दिब्बं चक्करतनं ओसक्कितं ठाना चुतं, अथ मे आरोचेय्यासी' ति । 'एवं, देवा' ति खो, भिक्खवे, सो

१. चक्कवत्ति – सीहनादसुत्तं – सी०, रो० । २. दळ्हनेमि – स्या० । ३. धम्मेन समेन – सी०, स्या० ।

「人類滅亡の真実」は、この仏教経典によった。
その原文をデーヴァナーガリー文字のパーリ語で、ここに表わす。

転輪王獅子吼経

चक्कवत्तिसुत्तं

Cakkavatti Sīhanāda Sutta

チャッカヴァッティ・シーハナーダ・スッタ

出典

THE
DĪGHANIKĀYA

ナーランダ版第８巻

人類滅亡の真実

一九九一年九月三十日　初版発行

定価　九八〇円
著者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
編集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二－一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1991
ISBN4 - 900497 - 73 - 8　C0014　P980E

麻原彰晃尊師 collection の本

ここに真理がある！
オウム出版

生死を超える

改訂版

死を超越した魂の自由を高らかに謳歌

B6判／1854円

激しい修行の末に死後の世界を経験し、ついに解脱を得た著者が、だれも示すことのできなかった「解脱」の真実の姿を浮き彫りにする不朽の名著。これなくして精神世界は語れない。

超能力・秘密のカリキュラム／健康編

改訂版

クリヤ・ヨーガの秘法が甦った！

B6判／1100円

ヒマラヤに伝わる肉体浄化の秘法を公開して大反響を呼んだ本書が、新たに体験談も加わり、改訂版となって再登場。アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、あらゆる病気を撃退するヨーガの技法が満載！

イニシエーション

悟り——覚者の智慧が光を放つ

B6判／2163円

本来、選び抜かれた弟子にしか伝授されない秘儀の数々を惜しみなく公開！ 悟りのプロセス、近未来の予言、そして豊富な体験談……。最高の叡智に達した著者によって説かれる真理に、魂は震撼する。

マハーヤーナ・スートラ

解脱——その真実の道筋が語られた！

B6判／3090円

解脱を果たし、悟りを得、絶対的な真理に到達した著者によって、大乗仏教・ヨーガの全貌が明かされた！ さらに、史上稀に見る解脱の体験談も同時に掲載。精神世界史上不滅の金字塔。

原始仏典講義一

今、覚者の限りない叡智がここに甦る！

A5判／2500円

いにしえの最終解脱者が説いた法の真髄が現代の最終解脱者によって、ついに明らかになった。釈迦牟尼の教義の根幹をなす『阿含経』『南伝大蔵経』の二大経典を、麻原尊師が鋭く解析！

マハーヤーナ・スートラPART2

実践するための生きた経典

B6判／2100円

お経は読むためのものではない。読んで、考え、実践するためのものである。「南伝大蔵経」から選び抜かれた経典と尊師説法、そして体験談が、絶対的な幸福への道筋を指し示す。

麻原彰晃の世界 第一巻

幸福に至る四つの預流支

B6判／2500円

人はなぜ、麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？ 現代に甦った覚者が今、真理の灯明で照らした"最高の道"を指し示す。尊師説法集「麻原彰晃の世界」。この本は、あなたの心を必ず苦悩から開放する。

麻原彰晃の世界PART2

巻頭幸福対談

尊師、麻原彰晃が斬る！

B6判／980円

人はなぜ、麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？ 現代に甦った覚者が今、真理の灯明で照らした"最高の道"を指し示す。尊師説法集「麻原彰晃の世界」。この本は、あなたの心を必ず苦悩から開放する。

超能力・秘密の開発法

増補・大改訂版

超能力のつかない修行は本物ではない！

B6判／980円

空中浮揚・透視・幽体離脱、未来予知……。正しい修行によってだれでも超能力を得ることができる！ 実体験に基づいた超人へと至る最高のメソッドを大公開。豊富な体験談がその真実を裏付ける。

●ご注文は書店にてお願いします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料各300円）

●オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03（3439）6043／郵便振替：東京2-109325

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『人類滅亡の真実』読者係」までお送りください。

また、オウム真理教に興味を持たれた方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、あるいは電話にて全国のオウム真理教道場までお問い合わせください。詳しい案内書をお送りいたします。

〒154　東京都世田谷区世田谷2-8 - 17
オウム出版「『人類滅亡の真実』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場） 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

終末への足音が聞こえる――
もう何もかも手遅れなのだろうか

滅亡の日

麻原彰晃

『黙示録大預言』の秘密のベールを剝ぐ

聖書の奥儀中の奥儀といわれ、その難解さゆえ、多くの論議の的となってきた『ヨハネの黙示録』。人類のターニング・ポイントを迎えて、日本は、世界はどこへ行こうとしているのか。最終解脱者・麻原彰晃尊師が『黙示録』を徹底解読し、二千年前、ヨハネが見たものを今明らかにする。獣の数字666とは？ハルマゲドンはいつか？『黙示録』に示された戦慄の近未来は、もうそこまで来ている！私達に残された道はあるのか……？

B6判／1854円

滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）

『滅亡の日』で明らかにされた恐るべき終末。その大破局の後に来る衝撃の世界とは？　生き残る者と滅び去る者の明暗。初めて明かされる虚空期の真実。着々と進む滅亡のシナリオを知ったあなたは、今、運命の選択を迫られる！

B6判／1900円

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料各300円）
オウム出版　〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL：03(3439)6043　郵便振替：東京2-109325

ISBN4-900497-73-8 C0014 P980E 定価九八〇円(本体九五一円)